特216
462

埼玉郷土讀本第一編

# 玉埼の等我

## 卷上

埼玉縣教育會發行

始

特216
462

埼玉郷土讀本

第一編

# 我等の埼玉

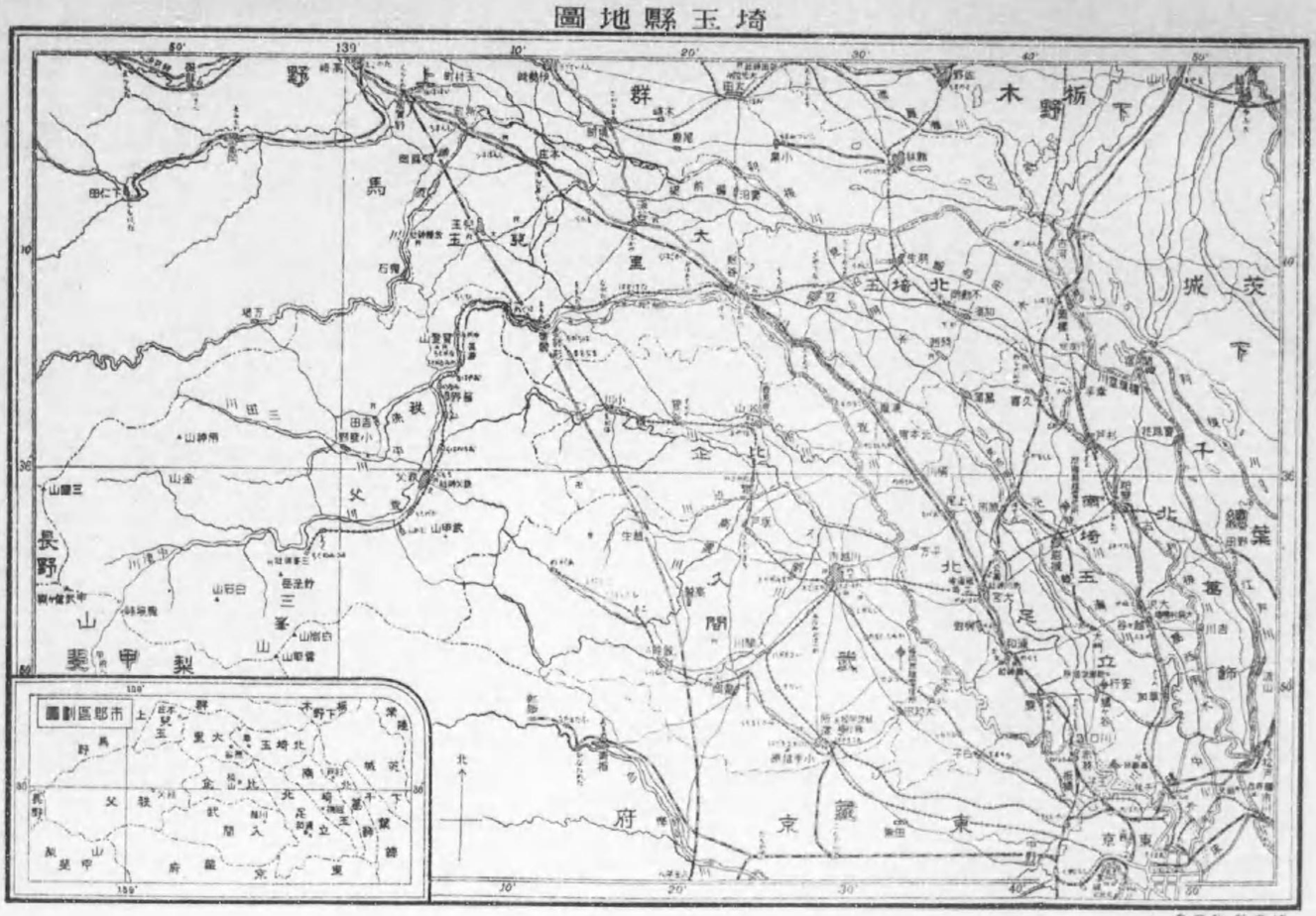
上卷

埼玉縣教育會編

昭和七年
帝國圖書館

表紙寫眞　雲取山に登る大瀧村光岩分校兒童（逸見嘉一氏寫）

# 埼玉縣地圖




埼玉縣教育會

# 序にかへて

郷土に現住する人に「郷土を語る」ほど困難なことはない。私はこの至難な仕事を依囑されて、全く途方に暮れた。語る前には理解しなければならない。理解する爲には踏査しなければならない。費用に限りがあり、また生活にも忙しい自分が、安心して埼玉を埼玉の人に語るまでの理解を持つことは、到底不可能である。私はこの苦しみを前にして半歳を悶えた。かういふ仕事には、埼玉の土地をすつかり見る機會を持つ人が適任である。

しかしながら、私とてもこの郷土に愛を注ぐ心を持つてゐるし、また郷土の人生にも興味を持つてゐるから、さうした讀物を物して見たいといふ考も強かつた。そこで頼まれたといふ事は忘れて、全く自分の仕事として全身の力を打込んで見た。それがこの一書である。私はたゞ本縣の少青年の諸君が、面白く讀んでくれれば滿足である。それ以外の何の酬も期待しない。

その代りに、これは私の眼を通して見た埼玉である。それがゆがんで居ようと、誤つてゐようと、それは私の論ずる所でない。たゞ私はかく見て、かく考へたのだ。埼玉がかくあるといふのではなくて、私がかく埼玉を見たのである。この一書は、私といふ人間を前提としての埼玉である。私はこの書で埼玉の地理を敎へようとするものではない。故に幾分の誤があつてもよい。それは讀む人、讀ませる人の批判の下に受入れらるべきだ。私はかうした態度でこのペンを執る。

この書は埼玉の地理書ではない。郷土地理ではない。私はこれによつて知識を語るのではない。印象を語るものである。あるがまゝの郷土をあるがまゝに眺めようと努めたのが本書である。たゞ一般の印象記と異る點は、埼玉に生まれ埼玉に育つた私が、自己の郷土としての埼玉に對する愛を以てペンを執つたことだ。私の主

觀を以て眺めて來た埼玉である本書を、科學的な觀察眼よりする埼玉と誤られることは、私の本意でないから特に御斷りして置く。

この私の企圖は、少い視察と乏しい資料とでは滿足を望めない。さうした完成は金と時との餘裕の出來た他日にまかせて、無理に綴つて行く私は苦しかつた。たゞ今の全力を盡すだけの事である。本書の叙述の體裁が時に紀行となり、時に說明となり、時に推論となるといふ複雜な形を採つたのは、鄕土の土地と生活とを語ると共に、興味を添へようとした爲であることは諒とせられたい。縣下として當然知らしむべきことが落ちてゐるといふ如き非難も生れるかと思ふが、それも前述の事情の爲であり、また主觀に立つた鄕土觀であるが爲である。地理書でない本書に於ても、その點は考慮はした積りであるが、本書としては、さうした事を重視してゐないのである。「鄕土を語る」ところの讀物は、ひとり縣敎育會の力によつてのみ生るべきではない。隨意に、自由に、それ〴〵の立場から執筆されたものが、續々と世に現はれて、本書の取殘した部分を明かにせられたいものである。

最後に資料蒐集の爲に、御忙しい中から御高見をお話し下さつたり、御案內下さつた方々と、寫眞を多數提供して下さつた、所澤陸軍飛行學校、東京日々新聞社、倉澤奎一氏、逸見嘉一氏に謹んで謝意を表する。

昭和七年十一月

下山懋識

## 目次


一　鄕土埼玉の顏……一
飛行場へ——同乘飛行——鄕土埼玉の顏——上空一千米——埼玉の鳥瞰——北へ北へ——川越の空

二　秩父の山ふところ……三
ふるさとの山——知知夫の國——山地に入る——長瀞に立つ——秩父盆地——昔を思ふ——銘仙を語る——山を訪ねて——三峯の山

三　中津川の奧……四
大滝の山村——中津川峽——金山のあと——八丁峠の上

四　三田川の谷……八
立上る煙——秩父の木炭——三田川の村——秩父の繭——小鹿野から國神へ

五　秩父の自然……九

大自然の力――地質を語る――滄桑の變――盆地は成る――水力を讃へよ――岩石の秩父――山の人生
**六　暮靄の中に**……一〇二
秩父を去る――靈場の數々――古人の迹――先人の惠み――のこす言葉

埼玉郷土讀本
第一編

# 我等の埼玉　上卷

## 一　郷土埼玉の顔

**飛行場へ**　時は十一時に近かつた。所澤陸軍飛行學校の本部西口から出ると、もう飛行場へ行く坂みちの櫻並木に、カーキ色のオープンの自動車が待つてゐた。お迎ひの人と乘り込む。すぐ走り出す。自動車はまるで乘つてゐる私の心を知つてゐるかのやうに、坂路をぐん〳〵と上つて、中央格納庫を目がけてまつしくらに走つて行く。二階建の西洋館が一棟、その右にアスフアルト塗の建物が二つ、そして鼠空色に塗られた格納庫が、更にその東に平たい角度の屋根を並べて、ガッシリと三つも四つも控へてゐる。戸はあいて、中に幾つも飛行機が見える。それどころではない、二階建の西側には單葉が三臺休んでゐるし、格納庫の東裏にも三四臺見える。それにさつきから音がすると思ふと、屋根越しに空鼠色の機體が見えはじめて、ぐんぐんと空にのし

て行く。空には、大きく、小さく、高く、低く、或は今まはらうとして、或は今下りようとして、五六臺の飛行機が空一ぱいに音をひゞかせてゐる。

その空がまたすばらしいものだつた。昨日の雪模様はカラリと晴れて、今朝はまつ白な霜が、この日本のはてからはてまで雪のやうに被せたらうと思はれた。そして日が高くなるにつれて、春のやうな暖かい日ざしが、今日は軍用飛行機の同乘許可證第一號をしつかりと握つてゐる私をつゝんでくれた。外套を小脇にかゝへて自動車の上にやゝそりかへつてゐる私は、この愉快な空の下を中央格納庫に向つて走つてゐる。その格納庫は、冬枯れの何十萬坪といふ赤ちやけた草の原に、ガツシリとした身體をすゑて快く私を迎へてくれた。

「さあ、こゝで支度をして參りませう。」と聲をかけられると、同時に自動車は止る。二三本の植込を芝で丸くとりかこんだわきを通る。衞所と見えて、小使さんらしい人たちが五六人で火鉢を圍んでゐるのを、硝子戸ごしに見ながら井戸のわきを行くと、被服庫と木札を打つた小さい建物の前に立止る。あの二階建のうしろのアスファルトぬ



りがそれである。五十ばかりの小使さんが來て、ガチヤリと鍵をはづす。入ると革の匂がする。壁際にも眞中にも戸棚が立つてゐる。

小使さんは、奥の方からカーキ色の地厚のズボンをさげて來た。連れの案内の人が、「洋服の上からでようございます」といふ。

私は外套と帽子をわきのテーブルに置いて、そのズツクのやうな厚地のズボンをつかんだ。

「靴をはいたまゝで、いゝのです」

といふ。右足を入れ、左足を入れ、上着のすそを身體にまきつけるやうにして、ズボンを引上げる。そして腰についてゐる細い帶皮をギユツとしめた。足首のところにも皮紐があつて、尾錠がついてゐる。

「こんどは飛行服、寒いから革のにしませう」と例の案内の人がいふ。總なめし革の黑いしなやかな飛行服を後から着せてくれる。新しいのだ。右手、左手、前をしつかり合せて、右肩の方からついてゐる金ボタンをかける。われながら立派なものだ。

「やあ、素ばらしいですな」

と思はずにつこりすると、

「バンドがまだですよ」

といふ。なるほど後にぶら下つてゐる。私があはててバンドを捉まうとする。小使さんが締めてくれる。まるで三つか四つの子供である。

それから眼ばかり出る毛絲編みの厚い頭巾を頭からすつぽりと被つて、飛行兜をつけた。革の垂れを下して顎の下でとめて、試みに眼びさしの上から飛行眼鏡を下して見ると、何だか自分にも飛行機が操縦できるやうな氣がする。實際被服庫から出て、また自動車の上にそりかへつた私の姿を見る人があつたならば、滿洲の空までも征服する勇士だと思つたかも知れない。

**同乘飛行**　自動車はゆるく格納庫をめぐつて、一かたまりの飛行服姿の人々の前に止つた。紅白の吹流しを立てた下に、葭簀二枚で北風をよけて、赤錆びたストーブが立つてゐる。テーブルが一つ、上に飛行帽が二つころがつてゐる。一群の人はこの俄



か飛行士姿の私に眼をあつめた。天氣もよかつたのだがどうも顏がポツ〳〵とする。

「この方です、同乘飛行をなさるのは」

私は姿に不似合に頭を下げた。

「私は岡本大尉、今ちよつと飛行機があいてゐませんから、少し御待ち下さい」

と床几をすゝめる。キビ〳〵した大尉の軍人らしい顏を見ながら、いろ〳〵と說明を聞く。その間にも空からは飛行機が舞ひ下りて來て、三十間ばかり向ふに止る。止ると操縱士はこゝに駈けよつて、不動の姿勢、擧手。その度に大尉は立上つては、

「〇〇曹長、急旋回練習三百五十回、濟みました、終り！」

「よろし」

といふやうに報告を受けられる。今は第二期の練習生で、この六月になると卒業する人々である。

そこで私の飛行は、地圖の上で幾度か相談した上でやうやく定つた。

「では大體かうしませう。中山道に出て、それをずつと鴻巢邊まで行つて、西に曲つ

て川越市の上空を通過する。三木中尉、縣の東の方を見たいといふのだから、高度を千米にとつて。すると利根川まで見えるから」

と大尉がいふ。

「すると時間はどの位ですか」

三木中尉は親指と人差指をコンパスにして、所澤から浦和、浦和から鴻巣、鴻巣から所澤とはかる。

「まあ一時間です」

一時間、私の心は嬉しいやうな恐しいやうな氣がした。

**鄕土埼玉の顏**　これでわが埼玉の顏が見られるのだ。埼玉に生れて埼玉に育ちながら、私はまだこの懷かしい鄕土の顏をしみ〴〵と見た事がない。それだのに、いよいよ今から、この鄕土の顏を見ることが出來るのだ。山よ、川よ、畑よ、田よ。われと等しくこの鄕土に生れ、われと等しくこの鄕土に育ち、今日も、このうらゝかな春にも似たやさしい日ざしを浴びて、家に、野に、畑に働いてゐる同胞たちよ。そはわれらの爲に、この埼玉を耕やした老人たちである。われらの爲に、今日も働く若人たちである。明日の爲に、樂しく學校に勉強してゐる少年少女たちもゐる。私は、あと數分、十數分にして、それらの樂しい生活を載せてゐるこの懷かしい鄕土埼玉の顏を眺めることが出來るのだ。

また一臺の飛行機が舞ひ下りて來て、操縱士が報告に來ると、大尉は、

「よし、その六十八號はこちらで使ふから。操縱は三木中尉」

と言ひわたす。すると三木中尉は、テーブルの上に飛行帽をとつてかぶりながら、「さあ」と私に言つた。二人はその飛行機の方に歩いて行つた。もうすつかり霜柱はとけて、泥の上に枯草の根がのつてゐて、田のへりでも歩くやうである。六十八號は正しくは五百六十八號で乙式一型偵察機である。鼠空色の二つの翼を張つた輕快な體を横たへ、少し頭をもたげ氣味にして、輕く尾を地につけてゐる。私はその翼をまはつて胴體に近づいた。

「こゝに足をかけるのです」

と胴體の三日月型の二つの穴をさす。ちやうど靴のさきが入る位の穴である。私はまづ下のへりに近い穴に左足をかけ、右手で座席のへりをつかむと一所に、右足を中ほどの穴に入れ、左足からまたいで偵察者席に入る。厚い板の腰掛の上に腰をおろすとちやうど肩から上が機體の上に出てゐる。

「バンドをしめて下さい」

見ると腰かけの兩端に廣いバンドが下つてゐる。とつて腹と脚のさかひで金具をかける。故障でもあつた場合に、金具の眞中にあるいぼをポンと叩くと、バンドはバラリと解けるやうになつてゐる。前には正面に方位計、その右に速力計、更にその右に高度計がついてゐる。左の端についてゐる二つの小さい眞鍮ボタンを

「これを押しては困りますよ。飛行機が止つてしまひますから」

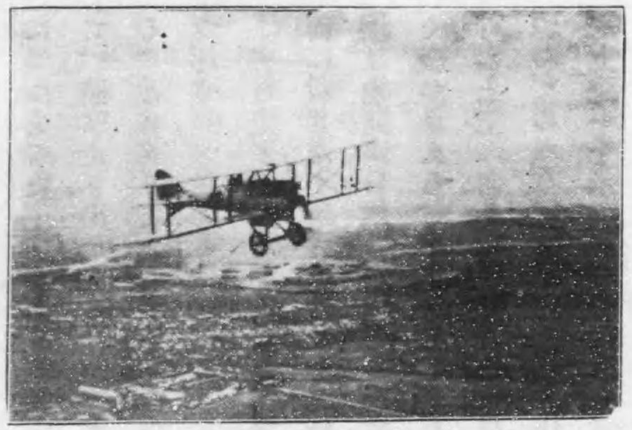
と注意する。

やがて三木中尉が機首の操縦席に入りこむと、プロペラーを廻すための自動車がやつて來る。忽ち物凄いプロペラーの響と共に、空氣の流れが烈しく私の方に襲うて來る、機體が震動する、私は何時飛びだされても差支ないやうに、しつかりと脇の針金につかまつた。すると操縦者が右手を擧げると一緒に、抑へられてゐた翼ははなたれて、機は走り出した。今か今かと私の胸は、機體が宙に浮く瞬間を待つて波だつて來る。とピタリと止つてしまつた。今他の飛行機が、私の機の前を横ぎつてゐるのであつた。

また走り出した。走つた。走つた。百米、二百米、三百米。ふと見ると、枯草を一面に載せたまゝ大地は沈んで行く。格納庫が沈んで行く。林が沈んで行く。もう私の機は地面から離れたのだ。高度計はずん〳〵と動いて行つて、下には小さくなつて行く森が見える、家が見える。高度五六百米と思ふ頃に、機は徐ろに左に轉回して所澤町の上空に向ふ。薄めた煤の中にやゝ茶色をとかしこんだやうな靄が、厚く大地をつつんでゐて、雪を頂いた高い山のみが視界の周邊に聳えてゐる。

**上空一千米**　私の眼はまづ富士の姿をつかんだ。毎朝戸をあけるごとに見た富士の嶺が今眼の前に立つてゐる。下界からはほんのりと白い雪の富士が、この上空から眺

めると、銀を刻んでみがき上げて強い光をあてたかのやうに、山膚の皺をキツカリと深くきざんで、濃い群青の空に立つてゐる。その高さ、その清さ、下界のものならぬといふのはこの事であらう。それを主將として、あとにつゞく山々の雪も素晴らしい。甲斐白峰、甲武信、木曾から日本アルプスにつゞく山々の嶺は、ことごとく清く白い雪と氷の波をあげて、はるかに西の天空を限るのであつた。



所澤町の上空

機首は所澤町の上空で徐ろに東にまはる。すると眼にうつる濃緑は長さ十二キロの狹山丘陵である。その濃緑の列にはさまれて、ボタ〳〵と水をたらしたかのやうに村山貯水池が見える。上の池、下の池、それをくぎる堤が白く、下の池にはポツンと白い塔が見える。數條の濃い緑の中に湖とも見えるこの貯水池を見出したのも愉快であつた。

「顏を出すなら左の方に、右側は風が強く當りますから」

と注意されたのを思出して、東に向つて急ぐ機體の左側に上體を出す。埼玉の北部はもやに包まれて明かでないが、黑い家の集まりは川越市である。その東から田圃が一面に廣がつて南になるほど廣くなる。中をうねるのは新河岸川である。川越市の南は入間平原で、西の山裾から東に向つてゆるやかに低まつて行つて、新河岸川の田圃で終つてゐる。廣い、實に廣い。そして平らである。その平らな野と森を後にした家々が、幾條も幾條も波形にゆれながら西から東へと聚落を造つてゐて、その聚落と聚落との間に、氣持よくくぎられた畑が碁盤目のやうに並んでゐる。緑色のは麥畑、茶色に見えるのは桑畑であらう。殆ど起伏は見えないが、聚落は低い丘をうしろにしてゐるらしい。

私はたゞ其の美しさに感歎した。林を除いては殆ど一寸の地ものこさないかと思はれるまで、わが埼玉の地は耕されてゐる。この廣い土地が小さい農具を振上げ振下ろ

すことによつて、一鍬々々と悉く耕やされてゐる。きまりよくくぎられてゐる。殘りなく利用されてゐる。そして村々が、その畑地を後にし或は前にして、この春に似たあたゝかな日ざしの下に靜もつてゐる。與へられた自然の惠みと、その惠みの中に住む安らかな人生とが、今私の前に鄕土埼玉の正面となつて顏を見せてゐるのだ。

子供の時に蟹をとつて遊んだ柳瀨川が、眞下をうねつてゐる。川べりは田につゞき、そこに聚落が東西に伸び、聚落の北は高まつて北にひろがる丘の畑地につゞく。畑地の中を、所澤から大和田町に行く街道が通つてゐる。あの黑い森が小田原北條氏の下についてたといふ柳瀨村の城山かしら、などと眺める中に、道路は丘から川べりに下りて、川越から東京へ行く街道と一しよになつて、橋をわたつてすぐに大和田町に入つてゐる。

町らしい町が見えたのは志木町だつた。新河岸川が柳瀨川と合して流れ下るところに、古い船つきの町として志木町が發達した。それに東武鐵道の東上線が通つて、西の方に町を引伸ばした。だからほゞ斜になつた十字形をなして、浦和所澤間、川越板





橋間の二つの道路の交叉點を中心にひろがつてゐる。知慧伊豆守の命によつてはたらいた安松金右衞門の美談を傳へる野火止用水の姿は見えないけれど、いろは樋の名をうけついだ新しいコンクリートの橋が、町の東で新河岸川をまたいでゐる。

**埼玉の鳥瞰**　そこで私は眼をあげて、埼玉の中央部をはるかに北まで眺めて見た。それは北西に高く南東に低いところの、極めて廣い扇狀地帶の一部である。西にはもやの中から紫黑の頭をわづかに出してゐる秩父の山地があり、その東にそうて兒玉、大里、比企、入間の低いうねりのある洪積層地がひろがり更にその東に、熊ケ谷町附近を扇のかなめにして、南、東南、東北に展開された平坦地がある。その扇狀の地帶の骨となつてゐるのが、幾條もの河流である。私はまづ二條の堤と、その堤の兩側にひろがつた田と、大きい河原の中に澄んだ空色の流とを見出した。それは荒川である。この流と河原と堤と田とは一つの大きな流の形になつてうねりながら南に走つてゐる。その東方には三沼用水に

| 埼玉縣 | |
|---|---|
| 位置 | |
| 東 | 東經 二九度五四分 |
| 西 | 同 二六度四三分 |
| 南 | 北緯 三五度二九分 |
| 北 | 同 三六度一七分 |
| 面積 | 三八〇・四三方粁 |
| 人口 | 一、四五九、一六六 |

沿ふ田耕地の流れ、それから綾瀬川の兩岸の耕地、元荒川の兩岸の耕地といふ風に、太古から働いて來た水の力と、その水の造りあげた土地とをはつきりと見せてゐる。

私の飛行機は、今そのかげを荒川の河原におとして、ひたすらに蕨町の上空へと急いでゐる。私は右の方はるかに東京の空まで望んで見た。煤煙ともやとにつゝまれた東京の姿は明かでないが、荒川はゆるやかに東南へその光つた水の面を曲げてうねらせてゐる。戸田の橋、川口の鐵橋も見える。

さうだ、もう浦和町がと私はさつきから見えてゐたその姿の中から、よく知つてゐる建物の一つ〳〵を探さうとした。小さい鏡と澄む別所沼の中の小さい宮が見える。女子師範の建物は薄綠に師範の屋根は赤く、縣廳は汚れた薄鼠色で、

空から見た埼玉縣廳



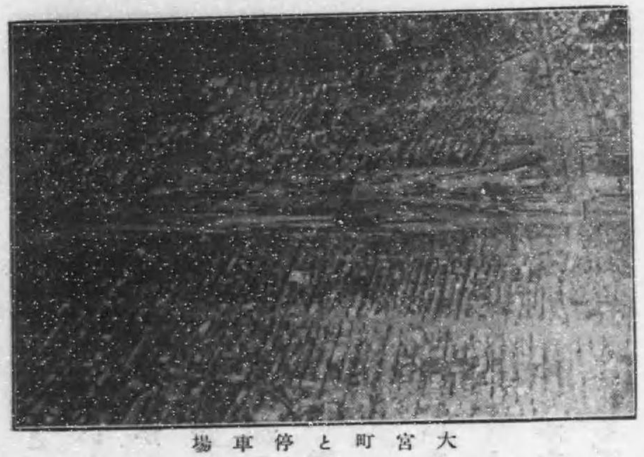
埼玉會館は平たい。赤い建物の並んだ製麻會社、第二小學、高等學校、新しい二階建の第一小學、女學校、停車場と、それ〳〵が次ぎ〳〵に見出された。停車場のプラットホームの亞鉛屋根に氣がついた時は、もう私は蕨町の北空を通り越してゐた。

それにしても、千米の高空から見た浦和町のすばらしい事よ。それは若い雄鷄が雄雄しい翼をひろげたやうに、新しい都市の大きい輪廓を持つて、中山道と高崎線・東北線の三大交通線の上にひろがつてゐる。伸びゆく町の命が、その急速な面積の擴大の上にはつきりと力を見せて、動く自動車と走る汽車の響の中に大きく呼吸してゐるやうに思ふ。

忽ち機體が左に三十度も傾いたかと思ふと、私の飛行機は靜かに向きをかへた。方位計の中の白い度盛はくる〳〵とまはつて「北」といふ字が出て來た。發動機の響は機體をふるはせて、針金をつかむ私の手から上體にまで傳はつて來るが、少しの動搖もない。翼にきられた風はまるで布でこするやうにわづかに出した眼のまはりの皮膚にあたるが、飛行機は全く空中に靜止してゐるかと疑はれるほどだ。たゞ眼の下に靜

かに動いて行く懐かしい郷土埼玉の顔の變化に、漸く自分が動いてゐるのだと思ふ。

**北へ北へ**　中山道の松並木に並んで、鐵道線路が走つてゐる。それがふくらんで幾條にも別れてゐるのが與野驛の北の貨物操車場である。大宮工場、停車場、中山道を中央に殊に東西にひろがつた灰色の瓦の群れ、氷川神社參道の杉並木、社殿、赤いのは新しいグラウンドに違ひない。私は大宮町を左方四十五度の下に眺めながら、交通が生み出したこの町の將來を考へてゐた。



大宮町と停車場

私は縣の東も見ずには居られなかつた。首の骨に力を入れて機體の右に顔を出すと、綾瀬川の流の東の岡の上に、岩槻の町が西から東に長く横たはつてゐた。町の後の綠の濃い森影は昔の城壘のあと、總武電車の停車場がその中央北にあ



る。それから少し隔てて無線電信局の建物とアンテナ柱が見える。その東の元荒川の流を隔てて、粕壁町がかすんでゐる。かうして眺めると、埼玉の地は東半にもかなり臺地があつて、その臺地の上には畑がひらけ、下には河流を中心に田圃がつゞいてゐるが、畑地の方が多い位に見えるのである。

私はそこでまた富士を眺めた。到底下界では見ることも出來ない雪の輝いた富士を眺めた。秩父の山々はやはりもやの中に沈んでゐて、武甲、三峰のいたゞきが少し見える。赤城も榛名も妙義もその姿はうすく、淺間山は眞白である。眞白い頂から煙を吐く淺間の姿につゞいて、白根山から北上州の空をかぎる三國山脈の連嶺が雪の輝きを揚げてゐる。赤城にはまだ雪はないが、縣の眞北に高い日光の山々は、男體・白根の諸峯が白金の光を放つ。それらの山々の腹から下をかくす薄もやの中に、ほのかに利根川の白きが見えて、それからほゞれた絲のやうに南にわかれる川、ひろがつた田と畑、點々とした聚落を載せた埼玉の土地が私の下に展(ひろ)げられてゐるのだ。

ふと見ると、機は東北線を横ぎつたところだ。綾瀬川と交叉した鐵路はまつすぐに

東北へと延びる。そのすぐ近くの驛は蓮田にちがひない。左には一筋の道に沿うて南から北に長い町が見える。乘る時に渡された參謀本部の地圖の上にさがすと、上尾町かと思つたら原市の町であつた。中山道はその向側に、並木やら家やら森やらを黑くつないで、北へ北へと長く引いてある。上尾の町も見出された。

徐ろに機體は翼を傾けて左にまはり、やがて桶川町の南にかゝる。鴻巣驛までは氣持よいほどまつすぐな鐵道に並んで中山道が走る。これだけの村、これだけの町を見ながら、發動機とプロペラーの音の外には何一つ聞えないのが變な氣持がする。しかしそれは死の靜寂ではない、わが豐かな鄕土埼玉は、眞晝近いこの日ざしの下に溫かに息づいてゐるのだ。

鴻巣も見える。町の東の田圃を前に、農林省の圃場も見える。また荒川が下に來る。比企郡に入る。秩父の東麓につゞく山々は影をうすく見せて、そこから流れ出した槻川・都幾川の川瀨は、平たく黑ずんだ綠の丘の間をうねりながら、入間川を誘つて荒川へと急ぐ。荒川の水の澄んで靑く深いのに比べて、若々しい綠色をとかしてゐる。

平方の町が見える。これは上尾町から川越市への道路が荒川を渡る所に出來た聚落である。古くから小さい河港をなしたことがわかる。そこでふりかへつて見ると、いま上尾驛を發した汽車が白煙をあげて走つてゐる。それは地上では走つてゐるわけなのだが、こゝからではまるで動かないも同樣である。地上の利器も空中の英雄にあつては話にならない。さしづめあれが支那軍の裝甲列車ならと、とんでもない事を考へぬでもない。

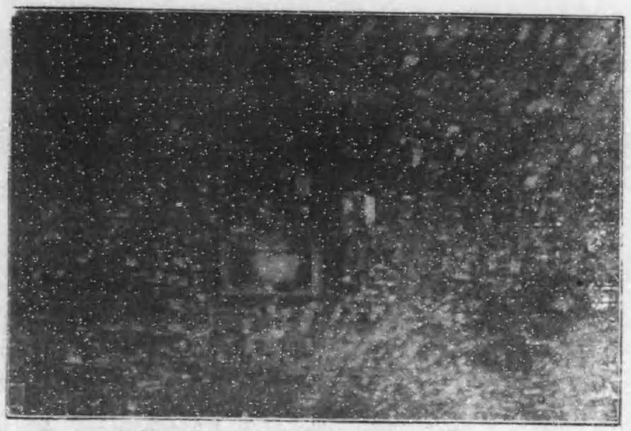
**川越の空**　もう川越市が見える頃と思ふ時、私は左下に意外に大きい伊佐沼を見つけた。今は冬の最中、紅白美しい蓮の花も綠の浮葉も見えないで、北半分は泥、南半分はにごり水が淺くたまつてゐる。太古の時に豐島・入間の入海がこのあたりまで來てゐたことは、地形からもうなづかれた。

いかにも城下町らしい貫祿を持つた川越市が私の眞下に來た。商業學校、中學校とその赤瓦の講堂、二つの小學校が先づ眼につく。私はこの短かい飛行にもう二十に餘る學校の建物を見たが、町でも村でも、第一に立派な學校の姿が眼に入るのは、教育

を重しとする埼玉の誇といふべきである。第一小學校の庭の東北の隅の肋木のほとりにいま一隊の兒童の列が動いてゐる。これが始めて見た地上の人であつた。

屋並のこんだ川越の町は、どん〳〵と後に送られて行く。第二小學、女學校、停車場、喜多院の森、紡績會社と見る中に、地面はまた桑畑らしい岡になる。麥畑になる。森。農家のむれ。學校。所澤へ川越からの道路と東京街道とに沿うて、森と家との連續も見える。

かうして私の機が南に飛ぶにつれて、この地方で原とよぶ畑地が廣くなり、雜木林がまじつて來る。右方に「く」の字形の西武電車の入間川の驛に近くその町と川とがはつきりと望まれた。



川越市（中央の方形は第二小學）

薄茶色の飛行場の中に格納庫が見えはじめる。忽ち二三の村々を過ぎて其の北端に出た。高度を下げる。ちやうどエレベーターに乘つた時のやうなしびれに似た氣持惡さが、ズーンと足の尖から瞬間に頭上にまですぎる。と、わが飛行機は思入り翼を左に傾けて旋回した。所澤町の道路の眞上を西から東へと通りすぎると、また右旋回、機體は發動機の音をとめて、飛行學校本部の西側の建物の屋根をすれ〳〵に、中央格納庫の西南に白く描いた大きな圓を目かげて下りて行つた。輕くずんと當つたと思ふと、すでに着陸。直ちに方向をかへて、三四臺並ぶ格納庫の前に止つた。

機體から下りて、前の被服庫で飛行服姿を解いた私は、岡本大尉・三木中尉と再び自動車に乘つて本部前に歸り、厚い御禮を述べて、無事で愉快だつたこの飛行を喜びながら校門を辭して停車場に向つた。そして來た路を武藏野線の電車で浦和へと走りながら、靜かに見たところの鄕土埼玉の顏を想ひ起してゐた。

その廣さ、その豐けさ、河は淸くそゝいで幾千の水田を列ね、丘はゆるく起伏して何萬の麥畑と桑畑とをひろげてゐる。林は靜かに村々をめぐり、道路は平かに都を求

めて走つてゐる。古の武藏の國の土地は西半は尾花と雜木の荒野であり、東半は河洲と葦原に水鳥が群れるのみであつたらうに、今に見るこの埼玉の姿の美しさ、ゆたけさ。私は心から鄕土埼玉の前途を祝がざるを得なかつた。

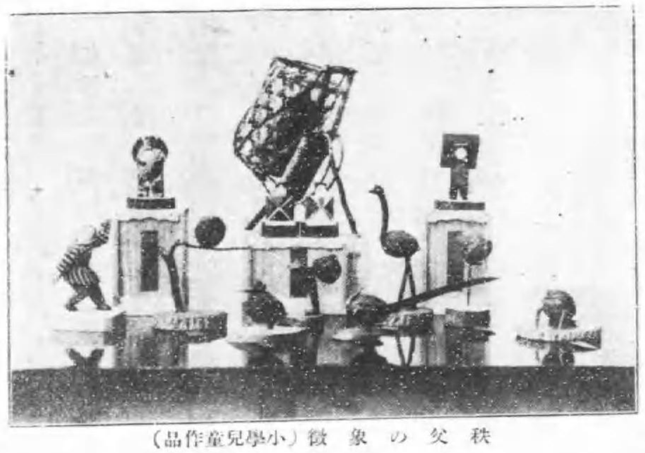
## 二　秩父の山ふところ

### ふるさとの山

ふるさとの山に對ひて言ふことなし
ふるさとの山はありがたきかな

詩人啄木はるかに望む故鄕の山にあこがれを送つて、この絕唱をのこした。「ふるさとの山はありがたきかな」われ〳〵が秩父の山を朝日かげにみどりに望む時、夕日の空に濃い紫にながめる時、心の奥からわき出るのはこの心である。

私は幾度か丘の上に立つて、この懷かしい秩父の山々を眺めた。三角の形をした釜伏につゞいて、重なりあふ幾つもの嶺の上に鋸の齒を見せる兩神の山、むつくりと頭をもたげる武甲山、三峰から雲取の高根の姿を見ては、これがわが埼玉の山たと思ふと、折さへあらばその山ふところに尋ね入つて、そこにある自然と人生に觸れたいと思はぬ時はなかつた。事實そこにはこの平野には見られぬ人生と自然の姿とが秘められてゐるのだ。のみならず、そこはまた古き埼玉のゆかりも存してゐる。


秩父の象徵（小學兒童作品）

**知知夫の國**　秩父といふ名を思ふと、わが古の知知夫の國を考へないわけにはいかない。埼玉の土地の開けはじめに、われらが祖先はこの自然の惠みふかき土地を見出して、畑を開き田を作つて農耕の道を立てた。先づ北部に榮えた聚落を集めたのが知知夫の國で、兒玉より大里・北埼玉にかけての古墳の數は、その古き文化のあとを物語ると埼玉縣史は說いてゐる。この古の祖先の人々が

その氏の神を川の源を求めて祀つたのが、今日の秩父町の秩父神社であるとすれば、秩父の山ふところに分け入るのは、また祖先の崇拜のあとを辿るものといつてもよい。

このあこがれの心を乘せた秩父電車は、秩父の山々が生み出した荒川の砂利を構内に山と積んだ幾つもの驛を過ぎて、秩父盆地の入口の寄居驛へと急ぐであらう。山は思ひきり電車の窓近くよつて來て、流に沿うた廣い道路ごしに荒川の清流の巖石を刻むのが見下ろされて來る。その水の清さ、細かい石の河原と、岸に切立つ巨巖、向ふ岸から直ちにそゝり立つ鋭い山の斜面、どれも都近い人にはあつと眼をみはらせる景觀である。

秩父やまみづ、流れの末は　　隅田川
花の都の　ナアソラシヨ　隅田川
もとは岩根の　草の露
ナアソレヤレコノ　ツーラシヨイ

（秩父小唄）

と唄にはうたはれてゐるが、あの煤煙と濁波と傳馬船や達磨船のうかぶ隅田川が、この川の末にあらうとは思はれない。

**秩父に入る**　寄居町は谷口の聚落で、秩父街道に沿うて東西に長い町並を川と鐵路の間に見せてゐる。町を取圍んだ桑畑と幾つも立つ煙突が繭と生絲の町であることを語つてゐるし、更に荒川のほとりに立つならば、河岸を形づくる巨巖とそれを洗ふ清流とは、象が鼻やそれにつゞく名勝をつくつて、既に秩父山地の山水の秀を示してゐる。對岸の屏風のやうな斷崖の上には、翠色につゝまれた鉢形城址があつて、本庄、寄居、小川と通つて鎌倉と上州をつないだらしい街道を荒川の險によつて扼してゐる。昔は相當に城下町も榮えたといふのに、今は夏草の中に埋もれた廓のあとが存してゐる。

寄居よりも山を嶮しくし、河を深くし、巖を高くし、町を小さくした羽久禮を過ぎると、いよ〳〵秩父の本色を現はして來る。川がえぐつた三波川層の岩石の谷は、その南岸には殆ど尺寸の地をも殘してゐない。藍を溶く水と白い河原が、黑い斷崖の下に

水音をはげしくしてゐる。川瀬の中にも巨岩がころがつてゐる。山は河岸にのぞきこむやうにして雜木に常綠木をまじへた衣をつけてゐる。たゞ北岸には、わづかの段丘が平地をなして山裾に殘されてゐるから、村々は街道に沿うて、この段丘の上に生ひ立ち、石ころの多い畑をひらき、まれには數坪にすぎない水田を石垣でかこんで階段狀に並べてゐる。田の水とは思はれない清い冷めたさうな水が、畑の間から出て、順次にその小さい田をそゞいで行く。畑は麥畑を少し加へた桑畑である。それは山裾にまで這ひ上つてゐるので、土地の狹さと人の努力とを思はせる。

山根山裾　ちら〳〵灯
夜機織るやら　ナアソラショ　とん〳〵と
桑の葉風が身に沁みる
ナアソレヤレコノ　ソーラショイ

（秩父小唄）

かうした唄がこの村々には機杼の音にまじつて響くのであらうが、急ぐ旅の車窓まで

名勝長瀞

は訪づれて來ない。

右手の鐵橋の上を走る電車の窓に燈があかい時、瀨の白い淺いところをえらんで鮎を

**長瀞に立つ**　夕やみが靜かに迫つて來る夏のある暮れがた、私は疲れた身體を名勝長瀞の巨岩の上に置いて、靜かに水の音を聽いてゐた。私の手は縞目の美しいその岩の冷めたい膚をなでて見た。その岩はたゞの岩塊ではない、この丘をつくり、向ふ岸の斷崖をつくり、川底をつくり、大地と山嶽をつくつてゐる地殼の一部なのだ。水の力は、たゞその背の上に一條の流を穿つただけなのである。岩の窪みがある。水の力が小石をころがして穿つた穴だ。中には昨日の雨水が殘つてゐたり、菅が茂つて川風にそよいだりしてゐる。對岸の巖を夕もやが紫に包んで

釣る人でもあらうか、投網を持ちながら渡つて來る。腰のびくの中がのぞきたいやうな氣がする。この巖と瀨とを月の光に眺めながら、寄居町まで舟を漕ぎ下したならばなどと思ふ。

うしろ見返りや　長瀞あたり
晴れて涼しい　ナアソラシヨ　虹の橋
舟は矢のよな　川下り
ナアソレヤレコノ　ソーラシヨイ（秩父小唄）

長瀞は峽流ながらも明るい勝地である。それは人氣幽かに、靜けさが身にしみるといふやうな場所ではない。南の岸上には白鳥の村の人家が點在して居り、後の段丘には野上の街道町が、紅葉祭に名高い寶登山をひかへて連なつてゐる。朝の山の姿、夕の流のかげもよいし、花は岸邊にトンネルをつくり紅葉は四圍を錦でつゝむその美しさは、晴れて美しく雨もまた趣が深い。スポーツマンにはグラウンドがあり、礦物研究者には標本の陳列所もある。雞犬の聲は谷に滿ち、時には自動車のラッパもまじる人里の中の勝地である。人々は歸りの心配もせずに、ゆつくりと明るい氣持でその巖と水とに親しむことが出來る。

長瀞の美を大にするための前奏曲として、羽久禮から野上・國神までの荒川の流があることを忘れてはならない。羽久禮をはづれてから左の車窓に見下すものは、その巖と水である。私はその巖と水との變化を樂しみながら、突兀と天をつく古生代の山々の間を縫ふ時に、ふと岩から岩へこの峽流をまたいで、對岸白鳥に通ふ吊橋のさゝやかなのを見出した。そしてこの橋一つにからむ幾多の人生に興味を持つた、これといふ傳說が存しゐないとしても。さうでなくとも白鳥の名がゆかしいではないか。

**寶登山神社**

| | |
|---|---|
| 社格 | 縣社 |
| 所在 | 野上村大字長谷澤 |
| 祭神 | 神日本磐余彥尊<br>火產靈命<br>大山祇命 |
| 由緒 | 日本武尊山上に神離を立てて祕傍の御陵遙拜の地といふ |

**秩父盆地**　昔時の秩父文化の中心をなしてゐて、國つ神の在りばしよといはれる國神を過ぎ、親鼻の鐵橋をわたると、車窓の右に開けるのは秩父盆地である。第三紀の

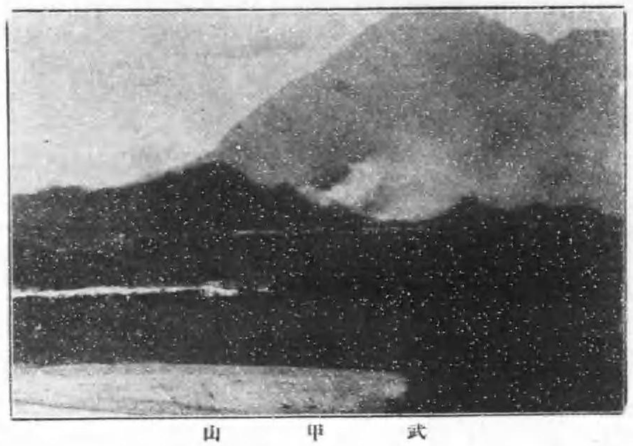
低い丘陵がその低部を埋めてゐて、周圍をめぐる赤平川と荒川とが右から左からこゝで一しよになる。この低地をかこむ山々の險しい姿はやゝ霞んで、兩神山の鋸なども かすかである。盆地に入る人々は、寄居から長瀞までの峽谷にも驚くが、またこの中央部の地形にも意外な氣持を持つであらう。

平絹の集散する皆野町をすぎる。國神と相對する町である。驛のほとりに鐵鑛の山が風雨にさらされてゐるのが目につき、黑谷の驛からは和銅の址のある山が指さゝれるのだ。そこから南は原谷村で、いよ〳〵小鹿野附近と共に秩父盆地の二大中心をなす平坦部に入る。その主邑が秩父町であるが、町の北方十數町の間は、所謂大野原の原野をなしてゐる。今日では秩父町水道の餘水を利用して、大きい開墾が出來上つた。大野原驛から南に走りながら右方を見わたすと、等しい距離に、同じやうな形の人家が規則正しく置いてあるのが、その開墾地の移住家屋である。すべてこの盆地の平かなところは河岸の段丘であるから、地下に厚い礫層を持つてゐるので水利に乏しい。爲に水田をつくることが出來ないが、こゝのみは立派な田が打ちつゞいて黃金の波打つ時が來る。これも文化の餘澤である。

**和銅の址**

所在　原谷村大字黑谷

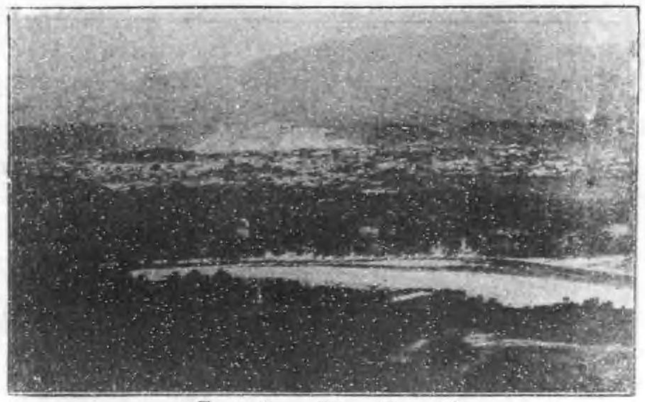
由緒　元明天皇の慶雲五年正月十一日秩父郡より和銅を獻ず、和銅と改元す



武甲山

盆地に入りこんだ人の目をひくものは、何といつても武甲の山の姿である。天にそゝり立つといはうか、岩根こゞしいといはうか、秩父町を守りたてこの平坦部の南にそびえてゐる山の膚は、うす紫にもやを帶びて、この秩父の里を見まもるやうに急角度をなした頭をもたげてゐる。黑く樹木におほはれてゐる山體のところ〴〵が、白く地膚をあらはしてゐるのは、山骨をなす石灰岩のあらはれである。秩父の町に近づくと、その武甲の山すその小丘に、階段狀をなすコンクリートの建物が見えて白い煙をみなぎらしてゐるが、その石灰石を

原料とするセメントの工場である。山は別に目立つほど削られたわけではないが、その身をそいでこゝに一つの産業を起し、人はそれによつて生活し、生産し、秩父の富と國の富とを增して行く。しかし何時の日にか人の力が勝つた時は、この山の姿が全くかはつてゐるかも知れない。人力と自然との戰は何處にもあるが、これはまた痛ましい攻擊である。私は秩父の人々の魂のふるさととして、この山の姿の永遠ならんことを望むものである。



秩父町全景

秩父の町は落ちついた町である。國の御祖知知夫彥命を祀つてある秩父神社は、二千年の昔をそのまゝの暗いまでに茂つた森の中に靜まりまして、この山と水の秀でた土地を神威高く護つてゐる。美しい女學校、廣い林業學校、この盆地の生命である養蠶と織物の爲の蠶業試驗所や工業試驗所が、





この古き知知夫の國に新しい文化を與へてゐる。町の東裏を秩父電鐵が走り、西の大通には、バスやトラックの姿がたえない。

**昔を思ふ**　こゝで私は秩父開發の昔を想像して見たい。一つの土地が人類の棲處となる場合に二つの路がある。川に添うて行くか、山の峠を求めて入るかである。われ〳〵は常に川の源に一つのあこがれを持つ。この水がどんな所から流れて來るか。これは河流が人類に投げる所の一つのなぞである。この清き水、この豐かなる水、時には猛き水の源の神祕を極めようと、人類は常に流の源をたづねた。私は秩父盆地が國神・羽久禮間の谷をいばらと樹木でふさいでゐた時に、山刀を振りあげて荊棘をひらいた祖先の人たちの努力を思ふのである。瀨は渡り、淵は岸によぢて、この盆地の中に尋ね入つた最初の人のあることを想像するものである。

秩父神社

| | |
|---|---|
| 社格 | 國幣小社（延喜式內） |
| 所在 | 秩父町 |
| 祭神 | 八意思金命<br>知知夫彥命<br>天之御中主命 |
| 由緒 | 允恭天皇三十四年<br>知知夫彥命九世の裔知知夫狹彥創建 |
| 例祭日 | 十二月三日 |

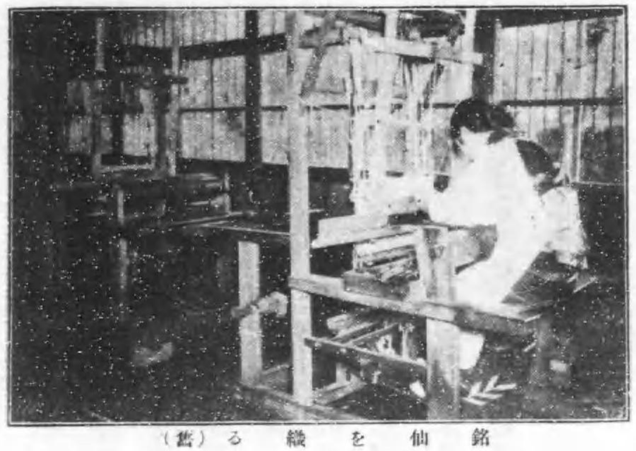
しかしながら、山もまた土地開發の大切な礎である。高く天を限つて、その向ふを未知の世界とする山の姿を見たとき、われ〳〵はどこまで擴がるかもわからない其の未知の世界にむかつて、大きいあこがれを持つ。その心は山が深いほど大きいほど强い。山の魅惑はその姿にあると共に、その彼方にある。わが祖先の人々が新しい民族の若々しい血潮とみなぎる進取の心に燃えて、東へ東へと山を越えて來たのも、この山のかくす未知の世界へのあこがれからではなかつたか。私は信濃の國からはひ上つた山路が、志賀坂峠をこえて、三田川・小鹿野の平坦部に出るのを見た時、さうした想像もゆるされはしないかと考へた。

川を溯つたのは最初は岩魚をとる爲だつたかも知れない。山を越えたのは最初は獸を狩る爲だつたに違ひない。だん〳〵に家が隔たり獲物が多くなると、足だまりの一時の小屋が出來て、時季を定めて住むやうになつたのが永住のはじめで、終に家族と移るやうになると、そこに農耕の業が起り、男は獵に、女は畑をつくることと藤かづらや蠶の絲で機を織ることにいそしむやうになる。かうした生活は今日の秩父でも山深く入るならば見ることが出來る。

そして人がふえて行き家が增して行き、聚落が出來て獸や鳥の數がへつて行く。と人々の仕事はだん〳〵農耕を主にするやうになつて行く。河岸の平らかな段丘を求めて畑が出來て、男も女と等しく農耕に從ふが、たゞ冬の農事のひまな時だけに獵をやる。しかしそれも十分の獲物が得られなくなると、女の機織をたすけて出來た布を生活のたすけに賣らうとする。そこで自家の必要以上に桑を仕立てて、養蠶を盛んにやるやうになる。田の作れない傾斜地に桑畑が多くなるのは、穀物の收穫が自給自足に不十分であるためだといつても誤はないと思ふ。

**銘仙を語る**　自ら織り自ら着るのに始まつた秩父の織物は、世の文化の進歩、人口の增加、都會の成長、交通の發達につれて、最初は平地の人との物々交換が、だんだんと商品としての聲價を持つやうになつて來た。殊に江戸といふ大都市が起ると、比較的にそれに近かつた秩父が、江戸人の着る絹織又は布團地の供給地となつたのは自然の勢であつて、そこで繭の生產の增加と、機織の工業化が行はれるに至つたのであ

る。卽ち專門の機屋又は仲買商人が出來て、江戸の好みによつて模樣や柄の工夫をして織手や染工を指導することが起る。かうなると秩父絹はます〳〵世評を高めて、今日の地歩を築くといふ風になつたと思はれる。



銘仙を織る（舊）

しかし明治になつても、まだ〳〵、秩父の織物は、家庭の副業として織られるといふ狀態をつゞけてゐたが、最近の機械の進歩と、動力の普及と、經濟組織の變化は、大きい資本による大きい工場で、多量に生産することが競爭に勝つ唯一の方法になつた。そこで秩父銘仙の名がます〳〵高くなると共に、この谷の家々に梭の音が賑はしく響いて、のんびりと機織唄が聞えるといふ情景は乏しくなつて來た。



山の高さにナー　また陽はくれて
　今日も機織る　秩父の乙女ヨー
絹の白絲心でそめて
　著るは誰やら　氣にかゝる

（新井修氏作）

といふやうな唄も、のどかには唄はれないほど忙がしい工場が多くなつた。

昔の秩父銘仙は、山里に育つたつゝましい少女であつた。心は素直で身體は丈夫、なんでもいとはずによく働いて、如何にも自然のふところに育てられたといふ姿である上に、山水にみがかれたその肌は、都に出して水道の水で洗ふと、本來の美しさが出て來る、氣位も高くないといふところを見込まれて、鄙から都へ望まれては花嫁となつて行つた。そして夫にも家にも爲になる妻として、世の手本となつたのである。ところが丈夫と地味で賣出した生娘姿の銘仙も、時代が移れば、のんきに都から來る嫁さがしを待つてゐるわけにはいかない。さがす人より嫁の方が多くなつて、その嫁

入娘がどれもこれも都住居を望むといふことになると、さがし手の好みにあふ乙女たちだけが先にえらばれて行く。

それには、たゞ自然に育つただけではならない。よい衣物も着せる、お化粧もする、都にはやる諸藝も仕込む。都に耳かくしがはやれば、たとへ山の娘であつても耳かくしに結ばねばならない。そして大勢の人の集るところに物見遊山と出かける事も必要だし、口だつしやな人を頼んで仲人口も思入り大げさにきかせなければならない。柄は派出に、色は明るく、流行の成行を見て織上げた上に、共進會や見本市と足をのばして、廣告宣傳に骨折るのもそれである。その上に裏店のお神さんも奥さんとよばれる世の中では育ちは田舎でも上流の社會をまねて、萬事おしとやかに茶もたて華も生ける教育が必要だから、銘仙もお召や金紗の袭を持つことが大切である。伊勢崎、桐生、足利、佐野、八王子と競爭相手を持つわが秩父銘仙が、今日高級銘仙の第一位を占めて關東關西の廣い販路を持つてゐるのは、その裏に當業者のかうした大きい努力が存してゐることを忘れてはならない。

秩父の絹織物

| | | |
|---|---|---|
| 產額 | | 二、〇〇〇、〇〇〇疋 |
| 價格 | | 九、〇六一、八九二圓 |
| 並幅 | 銘仙 | 一、七九三、七一六反 |
| | 生絹 | 五三、一三四反 |
| 廣幅 | 銘仙 | 一五二、五九七反 |
| | 座布團地 | 九二六、六四四反 |

## 秩父山國　武甲のふもと

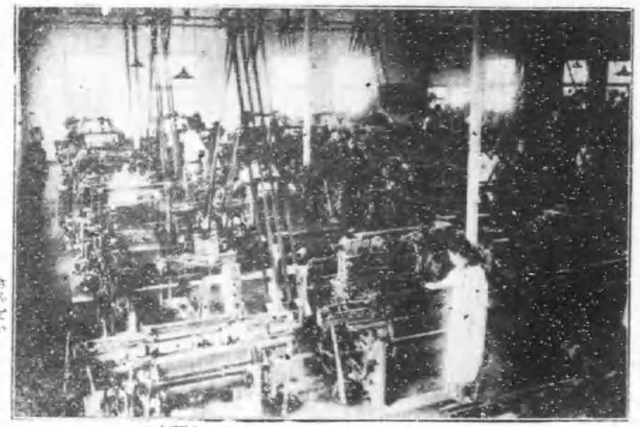
### 横瀨高篠　機どころ

### 機は絹機　本秩父

私はその本場の横瀨・高篠二村に寄りみちして、郷土の誇である秩父銘仙の生れるところを訪ねて見た。秩父町のお花畠驛の北の道を東に辿ると、右に工業試驗所、左に秩父セメントの工場をながめて、秩父町の東側に南北につゞく丘陵の東側にまはりこむ。こゝは横瀨川を中心に南北につゞく平坦な谷で、東に七百米を超える高篠の山山が、高く關東平野をかくしてゐる。その平坦部にひらけた靜かな村が横瀨と高篠である。道をかこむ桑畑と麥畑を前にして、必ず煙突を持つた大構への家が道から少し引込んで、山を後に或は畑を背にして並んでゐる。私はさうした家々の中でも大きい工場の一つに入つて見た。

門を入ると池などのある廣場に小砂利が敷きつめてある。突當りの事務室に來意をつげると、事務員らしい方が椅子をすゝめる。早速に茶を頂く。やがて應接室に案内されて、畫近い忙しい時を心よくお話して下さつたのは、女學校を出たのも近い令孃であつた。はき〳〵と應接される。この方が御主人の留守には工場全部をきりまはした上に、寄宿舍の八十四人の女工の監督、教育から、その娯樂まで世話をして居られるのには敬服した。

まづ工場を見せて頂く。工場といつても、私の最初頭の中に描いたのは、昔風の機織工場であつた。あかりこそ電燈になつても、窓の暗い、ほこりの多い、そして古びた昔風の機臺が土間の上にびし〳〵と並んでゐる。織女たちは姉さんかぶりで腰をかけて、梭をなげながらの機織り唄。それであるのに、まづ私の耳にしたのは、大機械工場などの窓から洩れるやうな力強い響きであつた。入ると、それは明るい清らかな大きい建物の中に、六十九臺の自動織機が並んでゐる。今は臺數の多少こそあれ、秩父は動力織機の時代である。上の梁には、縦横にシヤフトが走つてゐて、そのはづみ車から織機にかける帶革が、斜めに幾條も幾條も走つてゐる。スピードの速い機械の動きにつれて、着尺、布團地、廣幅の美しい銘仙が來る夏の流行色も鮮かに織られて行く。二臺を一人の女工が受持つて、一臺一匹を一日に織上げる。女工は靜かに受持の機械を見守つてゐて、時に梭をかへたり絲をついだりするだけである。その布は織紋の美しいものもあれば、精巧な色と形を描き出すのもある。縞とかすりを銘仙の特色と見てゐた私は、かつて京都西陣の工場で不思議な機械と思つたジヤガードやドビーの機械が並んでゐるのに驚いた。


銘仙を織る（新）

染工場では、友禪染のやうに型紙をあてて六色も七色も重ねて行く染め方、セイミ加工で布地に縮緬のしぼを出したり、金泥を以て模様を描いたりする最新の方法と技術とが、遺憾なく

應用されてゐるのを見て、流行界の尖端を行く秩父銘仙の前途を祝福した。この工場で織上げたものが、東京は三越・松屋・松坂屋のショーウインダウを飾り、また大阪の問屋筋を經て關西にひろがつて行くのである。たゞ一つ不思議でならないのは、これに使ふ原料絲の殆ど全部が前橋から買入れられるといふことである。分業制度が其の技術をすゝめ配給の途を開いて、秩父の絲で織るといふ時代でなくしたことは、やはり經濟組織の一變化を示すものである。

夏場は町の家並に雪の山を築く繭と、月幾日の市日を賑はす銘仙が、秩父の町の大きい土臺である。盆地全體の需要品をみたす店々のほかに、かういふ仕事をやる繭や織物の仲買店と銀行の建物の大きいのが、この町の生命をよく語つてゐる。それに炭俵の山と製材所の鋸のうめき、セメント會社の白い煙、それでほゞ秩父町を描くことが出來る。

**山を訪ねて**　紫に煙る武甲の山麓に近づいて行つた電車は、セメント原料を採つてゐる石炭石の新しい肌をその崖に眺めながら、徐ろに向きをかへて秩父盆地の南の谷を西に急ぐ。武甲山を肥料にするといつたならば、諸君はあつと驚くと思ふが、實際このあたりに、この山の石灰石を原料にしてカーバイトを造り、それに空中窒素を固定させて肥料を製造してゐる工場があり、また時計側のクローム製煉も行はれてゐるのだ。蠟燭のあかりに鐘乳洞を見物したことのある影森をすぎると、武甲の山の厚さをわきから眺める。思ひの外に薄い山骨が千三百三十六米の空に突立つて、全盆地を見下してゐる。

いよ〳〵山の國に入つたと思ふ。荒川の向ふ岸は低い丘陵の波がひろがつて盆地を埋め、その丘によつて人家がまばらに點じ、段々畠が斜面にはひ上つてゐる。そして南岸は狹い段丘が、仙元、矢岳、天日、熊倉の諸山の重疊する南をうけて、川筋に細く白川村に至つて消える。そこを三峯道が、うね〳〵と橋と坂とをつらねて村々を貫いて行く。電車は、さうした山村の石を載せた屋根を下に見たり上に仰いだりして、丘を截つては川を渡る。川は細流でありながら深い谷をなして、僅かな水を底の岩上に走らしてゐる。高い橋がかゝる。畑はもう桑と麥ばかりで、全く田といふものを見

ない。村の生活が大部分山にかゝつてゐることがわかる。又武甲山の西裏の谷を入りこむと仙元峠へ出るが、その中に山深く浦山村が隠れてゐる。三峰道は、しばらく電車に並んで走つてゐたが、一つの橋を渡るといきなり向きをかへて荒川の本流に突當る、そこに架つてゐるのが荒川橋である。

| | |
|---|---|
| 所在 | 秩父郡中川村 |
| 幅員 | 六・一米 |
| 鐵材 | 二九・五トン |
| 工事日數 | 一〇二日 |
| 形式 | バランスト・アーチ型鋼製 |
| 全長 | 一五六・七米 |
| 高さ | 河底より五三・二米 |
| 鐵鋲 | 四五七三四本 |
| 費用 | 二〇三〇五六圓 |

私は荒川橋を見た時ほど橋の美にうたれたことはなかつた。廣い河原に碧い水をうねらせて地殼を深くえぐつてゐる荒川の岸に、砂岩特有のくすんだ鼠色の巖が屏風のごとく立つてゐる。それを檜や杉の濃緑の色がかこんで、全體が暗い寂しさを作つてゐる眞中に、水面に近い堅固な



橋臺から眞白な虹のやうに、鐵骨を編上げて大きい半圓を描く橋桁の美しさ。自然の谿谷に配した人工の偉大なる曲線美は、こゝに秩父の橋の中でも最もすぐれた景觀をつくつてゐる。

**盆地から峽谷へ**　小鹿野町から白川村に引いた線は秩父盆地の西邊をなすもので、これから西の秩父郡は、山と谿谷とその間に存在する太古に似た生活とから成るといつてもよい。十文字峠、甲武信、破不の高峰の谷々の水は、この西半にわだかまる山嶽をうがつて幾つもの峽谷をつくり、ひたすらに平地を求めて千曲萬折した末に、この白川の地で漸くに盆地に出るのである。秩父電車を三峰口驛に捨てた私は、驛前の郷土館に古い石器や土器や、珍しい小田蒔の操り人形と浦山の藤織の衣を見てから、廣い道路を歩いて行くと、數町で立派な吊橋の上に出る。時が盛夏であるならば、胸のボタンをはづしてしばし涼風に汗を吹かすがよい。そして橋欄によつて眼前にひらけた美しい山河のたゝずまひを眺めよう。川下を見ると、武甲は薄くかすんで白雲が頭にかゝるのは夕立の前ぶれかも知れない。それから雨を帶びて右にそゝり立つ若御

子、熊倉の山々が、常磐木の衣をつけてその麓の村々の南をかぎり、左に第三紀の丘陵が波うつて河岸から起つてゐる。流は、三峰、妙法、白岩、御嶽の山頂が狹長な空をのこして作りあげた峽谷の底をかみながら、橋下に大きい淵をつくつて低きについて行く。その峽谷の美しさ、山にあこがれて來た人々の心は、先づその險しい山姿と山膚の翠微と、谷をこめる滉瀁の響きを滿喫することが出來る。

滑かな斷崖の岩の脚を、水底のいさごまで見える清流が洗つてゐる。そこにわだかまる伏した岩、横たはつた岩、岩の上から蛙のやうに飛びこんでは瀨に流されて河原に横になるまつぱだかの子供たち。秩父の自然美が子供の生活にまで見える。

この橋を中にして、電車終點の白久の聚落と、谷口の聚落の贄川とがある。前者は新しい交通によりて起り、後者は大瀧地方全體を後背地とする交通路の入口を占めて、馬と荷馬車の爲に榮えてゐた。今後幾年、交通の變化が聚落に及ぼす影響をこゝにまざ〳〵と見ることが出來よう。

私は橋を渡りきると急な坂をうねりながら登つて、贄川の町並の上手に出る。そして荒川橋から來る路と一つになつて、いよ〳〵奥秩父の谷に入つて行くのだ。もう右は崖、左は川、對岸にもまた少しの平地もない。谷一ぱいにみなぎる瀨音が高い。

足引の山川の瀨のなるなべに
　弓月が嶽に雲たちわたる

といふやうな情景には、大和ならぬこの山峽の道にも出あふのである。その河瀨は脚下に鉾をならべる檜や杉の梢越しにわづかに見るのみだが、見える度毎に岩と崖の大さをまして、眞白にわきかへつて流れてゐる。また澄む時のその水色の美しさ、あさみどりに清い水が飴のやうになめらかなうねりを見せて苔むした岩にからんで行く。

強石附近の峽流

二三十戸の人家が道をはさんでせゝこましく並んでゐて、休み茶屋は三峰參詣の人

を目當てに名入れ手拭を一ぱい吊し、荒物屋は物置から店先まで商品を積上げ、宿屋一二軒、理髪店の前には馬が飼料槽の中に頭をつつこんでゐるし、炭俵を山と積んだ荷馬車が煮賣屋の前に置きはなしてあるといつた所が、この谷の馬次場として發達した強石の有様である。そこを外れると大きい鐵管が肌に露をむすんで、道路を右から左に貫いて谷底の發電所に下つて行く。

大達原トンネル

このあたりから崖も谷も白い石灰岩になる。石灰岩は雨には蝕ばまれるが水には強いから、幾つもの巨岩が谷をうづめて横たはり、巖は壁の如く削り立つて奇峭な姿をつくり上げる。道はさうした岩壁に突きあたつて、その巨巖の底をくぐりぬける。大達原のトンネルである。この下あたりの激湍に名高い金藏落しの勝景がある。トンネルをくぐると、眉のあたりに



妙法ケ嶽の頂きが見える。三峰の奥の院である。

**三峰の山**　には大瀧村大輪から登るのである。茶店で旅館を兼ねた四五軒の店が、山らしい立派な木口の柱やたるきを見せながら、兩側に並んでゐる。風になびく名入手拭をにぎやかに吊して、お中食もやれば一夜の宿もやる。そこで一休みした腰をあげて、大瀧村落合の方に入る道とわかれて鳥居をくぐると、だらだら坂を下りて曲る。曲るともう身は登龍橋の上にある。

登龍橋

川にまたがつて向ふ岸にかけた登龍橋は水面高く朱塗の虹を描いてゐる。谿にひゞく足音を靜かにきゝながら其のまん中に立つと、左岸の茶店をのせた大岩石は、斜に河底につゞいて、水際に更に幾つもの巨岩をころがしてゐる。右岸もまた數間にあまる白肌の岩で、その間を流れる水の碧

さ。底の岩肌が縮んだり伸びたりゆがんだりして水をとほして眼にうつる。人魚の躍ると見たのは、右手に銛を持ち左手に覗き硝子をもつた裸體の男が、山魚を求めて碧流を泳ぐのであつた。足が水をとほして碧い。

流の水上を仰ぐと、瀅洸の響きをよそに、尊い三峯の山が何千萬といふ黑い檜の矛を體につけて立つてゐる。谷間からほのかに煙るのは、もう日が傾いて來たので霧がまくのであつた。流れの音は谷に滿ちてゐながら、その姿その境の靜けさ。この御山に登ると思へば、身は橋上にあつて心は神代にかへる思がある。霧はます〳〵ひろがつて山の中腹をはふ。

朝に朝霧
ゆふべにや
狹霧
秩父三峰ア

霧の中

霧にまかれりや
三峰さまも
霧にまかれた
まゝに寢る

（野口雨情氏――詩篇）

茂る檜の木の下かげのしめつぽい山道をあへぎながら登ると、涼風と共に瀧音がひびく。二十一丁目の清淨の瀧である。水しぶきが袖にかゝる。そこの茶屋で力餅を味つてまた登ると、全長五十二丁で木立嚴かな頂上の平坦に出る。神門をくぐり階を上つて神殿に額づくと、今しも淨衣の神官の祝詞の聲は淸く、神鼓の音は蓼々と霧にかすむあたりの老杉の梢に響くであらう。檜造りの貴賓館をはじめ、建てならべた參籠所、講堂、書院等の宏大なことは、縣下に比を見ない。さすがに一道三府二十二縣の

廣き地方からの參詣者を集めるにふさはしい設備である。

私は三峰神社の神威のあらたかさを説くと共に、その四圍の山容を説くことを忘れてはならない。夜が更けると、佛法僧鳥も鳴くといふこの靈山は全く靜寂の境に入つて行つて、草も木も山も太古の姿に歸る。そして再び朝が訪れた時、神殿を拜したならば杖をふりながら社後の展望臺に遊ぶがよい。わづかに平地を求めて建てた建物の屋上に立つと、雲の海にうかぶ山々の姿を

三峯神社

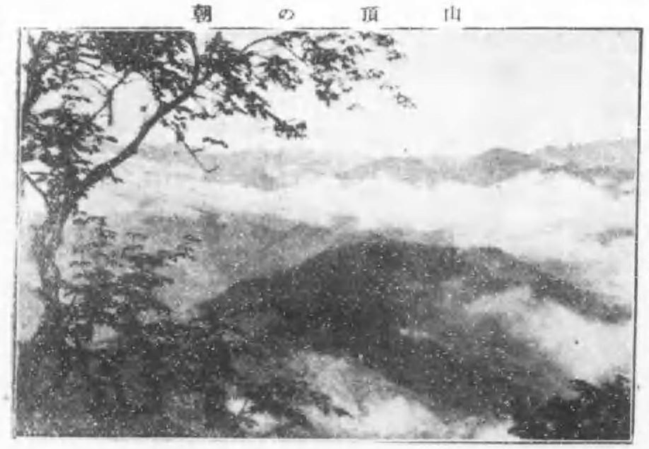
**三峰神社**

| | |
|---|---|
| 社格 | 縣社 |
| 所在 | 秩父郡大淵村 |
| 祭神 | 伊弉諾尊<br>伊弉册尊<br>景行天皇<br>文武天皇（祀配）<br>聖武天皇 |
| 由緒 | 景行天皇四十一年日本武尊この山に登り諸册二神を祭つたと傳へる |
| 例祭日 | 四月八日 |



見ることが出來る。雲は綿の如くにひろがり、綿の如くちぎれ飛んで、山腹から下を見せたり隠したりする。これが高い山の頂きとは見えない角立つた島々は、それ〴〵に名を指すことができるのだ。北には御嶽、觀音山、天理嶽、鋸をなす兩神山、西には大きい裾をひろげた雄々しい白石山、白泰山、南には近き妙法ケ嶽から白岩山とつゞいて、二千米の雲取山につゞく屋根はさすがに雲の上である。雲取の右には大洞山が見える。強ひて遠い土地に求めないでも、われらの郷土埼玉にも登高の快を十分に求めることが出來る美しい山々があるのだ。

晝は握飯を腰にして先づ妙法ケ嶽の鎖をよぢたり、白岩山の一つ手前から左の谷に下つて、大日向の太陽寺を訪れるのもよい。又更に山深きを望むものは十分の身支度をとゝのへて中



山頂の朝

津川の仙境に分け入るのもよい。

## 三　中津川の奥

**大瀧の山村**　そこで私は中津川峽を語る前に、まづ大瀧村の生活をふりかへつて見よう。三峯、白岩、雲取、白石、御嶽、白泰の諸山を一村の中にもつてゐる大瀧村は面積三三二方粁、一府二縣に境する縣下第一位の大村であつて、第二位の兩神村に五倍する面積を有してゐるが、人口は僅かに五千、一方粁に平均十六人をいれてゐるに過ぎない。もしこゝに縣下平均密度の人口を盛るならば、川越市、熊谷町、大宮町、浦和町の總人口の和と等しい數をいれることが出來る。しかしながら住民は、荒川と其の支流の谿谷に、わづかに平かなる土地を求めて住み、幾つもの小さい聚落をつくつてゐるだけである。滿目山また山で、全村で米を産すること僅かに二俵半、とまでいはれるが、木炭は全縣第一位を占めて百二十萬貫に及んでゐる。大瀧村は山村の生活を示す標式的の聚落である。



私は三峯登山道とわかれて、大輪から奥深く入つたことがある。鐘乳洞があるといふ石灰岩の崖を向ふ岸に見ながら、岩をかむ荒川の左岸について溯つて行くと、三峯の山頂をまはりから眺めるやうな谷に廣い街道がぐるつとまはつてゐる。崖の上に五六軒の家があつたり、谷底に橋をわたして、四五軒の家が向ふ岸に見下されたりするのを過ぎると、石灰岩が鐘狀に立ちふさがつた下に、一群の聚落が現はれて來る。途中に遇ふのは草刈籠を背にした女か、山のやうに炭俵を積んだ荷馬車である。時に其の荷の上に女たちが乘つてゐて、珍らしさうに自分等を見て行く。

その聚落はちよつと强石の樣子に似てゐるが、やゝ平地が廣いのでゆたかに並んでゐる。前に廣い庭を持つた家、賑やかに雜貨を並べたり下げたりした家、郵便局、肥料や炭をやりさうな家、小さいながらも全谷の生活に必要なものは備はつてゐるらしい。川はそこで大きく曲流してゐるが、その曲つた少し下を堰きとめて水電用水の取入口を作つてゐるので、清流漫々のおだやかな姿を示してゐる。こゝが大瀧村字落合である。落合といふのは、中津川と荒川と落合ふ所なのだ。

河中に堅固に築かれた堰堤を眺めながら、私は路傍の石に腰を下ろして湖に似たゆたかな景色をながめてゐた。半裸體の四十男が、鋤と袋をさげて脇を通つた。見ると尺に近いやまめが袋の中に身を曲げてゐた。

落合を通りすぎると、中津川にかゝる吊橋がある。渡ると水力發電所が地響きをたててゐる。私が行つた時はそれからはもう自動車も通じない道路であつたが、今は立派な道が椚平をすぎて鶉平まで通じてゐる。鶉平は大瀧村の主邑であつて、大瀧村の小學校本校の所在である。村をあげて學校が七つ、その六つはこゝの分校である。この村の子供は、尋常科でも里餘の遠くから峠を越え河をわたつて通ふのが常で、高等科は本校と一つの分校にしかないから、坂を上り、山の峯づたひを二里歩いて、更につゞら折りの坂路を辿りながらこゝの本校に通ふものが少くない。場所によつてはこれすらも望めないのである。

> 音讀の聲はきこえて夏あさき簡易學校の
> 青き屋根草（山の學校）
> 川わたり來し濡足のまゝの生徒等の今は
> 朗かに音讀するも
>
> （前田夕暮――原生林）

壯年期の谷は、水面から十數間上の左岸に緩傾斜をのこしてゐて、鶉平の家々がそのわづかな地面の上に、甲家は乙家の棟木を足もとに望むといふ有樣で建つてゐる。重い瓦をこの山中まで運びこむことは容易でないから、悉く檜皮葺で、學校だけが亞鉛葺にしてある。それでも、河から上つて來る斜面や家のまはりは、石と土と半々にまぜたやうな畑をなしてゐて、桑とこんにやくが栽ゑてある。畑中に立つ數十本の柿の木には、秋はかゞやく赤い實をつけて、峯の紅葉と美しさを競ふのである。

實際こゝの秋は美しい。平野ではまだ霜などを考へないのに、妙に底冷えすると思ふ朝は、もう草の葉に白いものが置いてある。見上げる山の腹から引いてある掛樋の水で顏を洗つて外に出ると、裸足には下駄の痛いほど冷めたいのに驚く。數坪の庭を出ると道、道は削り下げた谷の水を見下して、全村の家々の軒先をうねつてゐるのだ。

| こんにやく | | | |
|---|---|---|---|
| 芋 | 秩父郡 | 金澤村 | 六、〇〇〇貫 |
| 同 | 同 | 横川村 | 二四、〇〇〇貫 |
| 同 | 同 | 日野澤村 | 二三、五四四貫 |
| 同 | 同 | 國神村 | 二〇、八六八貫 |
| 同 | 同 | 大瀧村 | 二二、五〇〇貫 |

（縣下產出順位）

山の家は朝が遲い。石を載せた屋根は悉く默してゐて、谷全體は靜寂の中にある。たゞ醒めてゐるのは川の音だけだ。岸の岩の上から前山の中腹にまで茂つた鉢形の常綠樹の中に、さやかな鳥の音がする。冷えとほつた聲がピンカラと川の面にひゞく。山の頂きにはほのかな朝日がさして見てゐる中に鮮かな度を增して來ると、谷間のもやがうすれて行く、山腹の紅葉が眼ざめる。そゝり立つあらゆる山肌には濶葉樹の鮮黃色にまじつて、櫨か山漆の紅と紅葉の紅とが見える。日が昇つて滿山がすべて黃に紅に光をうける時、そろ〳〵家々の軒に朝げの白い煙がからんでは冷めたい空氣にとける。淸爽といひたいのはこの村の秋の朝である。

鶏　平　附　近

平地の少いこのあたりでは、三十度を過ぎる斜面でも燒畑として利用する。山腹に



ぶす〳〵と白い煙の上がるのがそれだ。火を放つて下草を燒拂ひ、ざつと蕎麥の種子をまく。まいた種子は土をしるしばかりかぶせるが、搔きまはした程度である。それでも自然はこの疎末な一時づくりの畑を大切に見まもつて、秋になると、白い花が一ぱい咲く。信州更科のより味がよいといはれる蕎麥の花が、この谿谷の山々の腹を眞白にするのだ。

燒畑は全く自然の惠みにまかせた耕作である。燒畑を作るにはまづ樹木を伐り倒すのが一仕事で、次にその下草を燒き拂ふ。燒いた灰は肥料になることは勿論である。

そこで、畑の上端に立つて風にまかせて種子をふりまいてからちよつ〳〵と鍬でまねごとばかりの覆土をする。あとは雨露の惠みと日光の力にたのんで收穫をまつばかりである。肥料などは運ぶことも出來なければ、またやつたところがこんな斜面では一雨でなくなつ

山原の伐り拓きたる新畑のばら播き麥の
今は青みつ
傾斜地のばらまき麥は青みたり雪解濕し
て雲雀は鳴くも

（前田夕暮――原生林）

てしまふ。そこで、作物の性質に應じて五六年も畑にして置くと、あとは杉や檜の苗を植ゑて永い休養をさせ、また地力を養ふのが例である。

中津川峽に遊ぶものは、この鶉平から更に山深く入つて行くのだ。今は中雙里まで道路がひらけようとしてゐるが、元は馬のみが通れる小徑が山谷をうねつて行くのだ。谿ごとに水があり、時には瀧がある。小雙里、十々六木といふやうな部落——それは人家五六軒に過ぎない——を過ぎると、大きい一本杉のところに出る。まはりに二三軒、あとは背面の山腹高くに五六軒の家が見える。瀧澤といふ地で、それに續いて濱平がある。もう大分川が淺くなり水が少くなつたやうな氣がする。

そこで川をわたると、三尺に滿たない小徑が川の右岸をうねつてゐる。登つたり下つたり、山畑のわきを通ると思へば、墓石の淋しいほとりをすぎる。このあたりでは炭俵をつけた馬は見られなくなつて、背負梯子に三俵乃至四俵をつけた人たちに二人

焼畑

第一年　蕎麦
第二年　粟又は稗
第三年　小豆又は大豆
第四年　桑
三四年で桑がだめになつて來ると間に杉や檜の苗を植ゑこむ

三人と時々遇ふ。中雙里から鶉平か落合まで出すのであらう。

炭を運ぶ人々

朝の七時に鶉平を出かけて、濱平を過ぎて鹽澤につくと十時になる。こゝから鶉平の本校に通ふ子供がゐるといふ話に驚きながら、一層嶮しくなつた崖上の道を、岩の小さくなつた川を眺めながら行く。崖崩れに丸太を數本渡したところが幾箇所もある。さら〳〵と上から落ちる泉を見ながら崩れ落ちる岩片を踏んでわたる所も多い。中雙里に近づくにつれて山骨があらはに、岩松や山菅をつけた斷崖が前にも後にも突立つてゐる。灰白色の閃綠岩が大塊をなして河床をうづめた所がある。淀んで崖をめぐる川水が、急に音を立てて落ち注ぐところもある。さうした所に立つ古い橡の木が、特色のある葉をひろげて、幹に苔を厚くつけたのも深谷

にある感じを深くする。巨石の上にやまめを釣る人が見える。

中雙里は針金で吊つた一つの橋の向ふ側の、河岸から上に〳〵と重ねかけたやうに家々層をなしてゐる小部落である。河原に小童が五六人遊んでゐる。老翁がひとり、麥の穗をたゝいたのを双手にさゝげて谷風に簸らせてゐる。橋をゆりうごかしながら渡つて五六間上ると、道は蠶糞の臭高い家の庭に入つてしまつて、どこが出口がわからなくなる。

そしたらそこの草刈鎌を持つた庭先の少女にたづねるがよい。すると茗荷の茂つたわきの尺餘の徑を指すに違ひない。教へのまゝにだら〳〵とその草をわけると、川に沿うて上り下りの劇しい小徑が河原へ下りるやうについてゐる。上る時は手を膝に加へて前かゞみになる。下る時は踵に重みをのせて足ゆびを曲げて地に立てるやうにする。そして數町行くと、とんと下りた一歩を最後に、徑は河原に盡きてしまふ。河原は大は間に餘り、小も寸より長い磊々たる岩塊の重疊羅列であつて、その片端を河瀨が走つてゐる。

そしたら、足の先のやゝ平かな岩を見つけて足を運ぶのだ。かうした自然の道は、人性の自然に從へばよい。誰でもなるべく足場のよいところを選んで行くから、道は必ず足の載せよい所にある。その中に巨岩から巨岩にわたした一本橋が見えよう。中津峽の眞の嶮難は、愈々この一本橋に始まるのである。

一里といひ、一里半といふ峽路に、三時間餘を費すところの嶮難が山ふところの中津川部落の口を扼してゐる。でも今は徒渉りがないが、近くまでは岩を攀ぢては瀨をわたり、河原に下つては瀨を越える四十八瀨の難所を過ぎなければ、そこにまで行きつく事が出來なかつた。さうした道をひらいた事さへ既に不思議である。その山奥に二十七戸の聚落が存してゐるのは尙更不思議である。私はこれから土地開發の古人の難苦をそのまゝに踏んで、この仙境をたづねようとするのだ。しかもそれには一本橋を渡らなければならない。

長さこそ二間に足りないが瀨は早い。木膚に斧の目を入れた丸太は踏むと動く。巖頭に立つてこの一本橋を前にしたものは、誰でも感なきを得ないであらう。ほつと息

をついて上手を見ると、瀬のほとりの砂を掘つてゐる男がゐる。砂金を採るのだ。河瀬をわけて數寸の流をつくり、蓆をしきこんで上に砂をながす。すると重い金粒は蓆の目にとまつて砂は流れる。一日に缺けた汁椀の底に指の腹でかぶせられるほどの砂金が獲られる。せいぜい五十錢位だが、時には三圓に達する大粒もあるとか。財を求めることは容易でない。そして山の神秘に入ることも亦容易でない。眼前の一本橋は依然としてゆらぎさうである。

しかし思ひきつて一歩を踏み出す、腰を据ゑて第二歩を踏む、眼を眼の高さにある大木の幹につけて第三歩をはこぶと、もうしめたものだ。五歩六歩と足は運ばれて、あと二歩といふ時はほつといふ息と共に向ふの岩に飛び乘る。そして誰か見ては居なかつたとまはりを見まはすのだ。ふりむいて見ると、やはり流は早い、一本橋は細い、そこでもう歸る心は捨てて、心細く雜木の中に入りこむ細路を上つて行く。

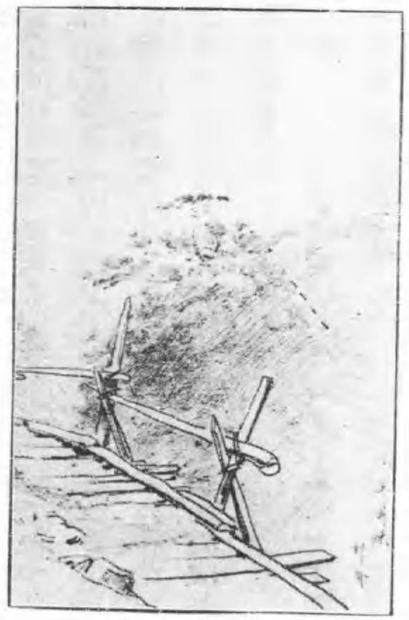
その道は、古い崖の草藪の中に子供たちがつけたあれである。木の根が出てゐる。篠が生えてゐる。時々一つの岩に右足をのせて、次ぎの左足をどこに載せようかと考へることがある。眼をあげると、山はますます深いのに、鳥の聲一つしない人間の世界の外である。たゞ川瀬の音のみが高なりしてゐる。

小さい尾根をまはるごとに、道は嶮しくなつて行く。川岸まで下つたと思ふと、杖を力に百米も二百米も攀ぢる。そして一つの尾根をまはる。そこにきまつて岩がのり出してゐる。廣い葉をぢかに岩肌につけて、可憐な紫の花をつけた草が苔と一緒にそれをかぶせてゐる。泉があつて、前に行つた人が飲みすてたらしい木の葉が、足下の小石の上に水にぬれて落ちてゐる。時には上側がぼく〳〵に腐つた棧橋がわたしてある。瀧もある。

だん〳〵上りが苦しくなる。下りはなげやりにだくん〳〵と下りて行く。そして下りきると恨めしさうに次の上りを見上げる。持つて來た仁丹をかむか、キヤラメルか氷砂糖を口にすれば素敵だが、それも盡きたら時計を見るがよい。もしこの山中で日が暮れたなら、夕立にあつたなら、秩父町近くの中川村あたりにも獲れるといふ熊にでもお目にかゝつたら、といふやうに、いろ〳〵の假想敵があらはれると、もう古め

たものだ、足はずん〳〵と次の上りにかゝつて行く。

かうして幾つもの山襞をわたつた後に、つゞら折りの峠にかゝつて少し頂に近い平坦を歩くと、また谷に下りる。そして一つの吊橋に出る。



中津峡

そこに來たら中津川はもう近いのだから、雜木かげの山躑躅の花の黄色に咲くところに腰を下ろして、一服するもよいが、山の中では吸殻は危險であるから、よくもみ消して貰はなければならない。連れの後れたのはここで待ち合はせよう。そして元氣を恢復してから最後の嶮難にかゝるがよい。この苦、この樂、この元氣が、山行の快い記憶をつくるのである。橋をわたる。その下の溪流の美と岩の偉とは、私に語る言葉がない。碧玉を溶かした水が、白肌の石灰岩をえぐつては一谷をなしてゐ



るのだ。一本の赤松のわきを通つて、妙に乾いた山徑をよぢて、頂きに近い山の肩をまはると、はじめて眺望がきく晴れやかな場所に出る。もう谿は淺い。目の前の山の肩にわが行くべき徑が見える。そして其の下から眞白な山腹が一板の板のやうに平面の岩となつて谷底にまでとゞいてゐるのを

「あれが、とても質のよい大理石ださうです」

と說明されると、あつと驚かざるを得ない。その岡上九二六米の標高をもつ山の彼の方の、右の山からなそひに落ちるゆるやかな斜面に家が見える。斜面が河に下りついた所には大きい河原があつて、河原を前に大小の家々が浮世はなれて置かれてある。

山肩から電光形に下りる。とん〳〵とどこまでも下りるとすつかり濕つぽい谷底である。木立が小暗い。苔が深い。小倉澤の金山の方から來た神流川が、深い淵を足下の岩壁の下につくつてゐる。底の小石も見える。

その淵の上にまた丸木橋が高くかゝる。すつかり苔につゝまれた橋は意地惡くしめつてゐて十米に近い。渡るとまた登りで、登り切つた所は山肌が出て風化した石灰岩

がさら〳〵してゐる。路の右手の岩ごしに覗くと、今わたつた神瀧川が薄い壁のやうなその岩の根元をえぐつてゐて身の氣がよだつ。草に腰を下ろすと、小さい赤い撫子に似た花がある。毘藍樹とかいふ珍らしい植物ださうである。しかしむやみに山の草や木は採つてはならない。それらは其の境に置いて眺めるところに趣味がある。家の苞にするまでの執着も用意もなく草木を折ることは、わが一個の一時の慾をみたすのみで、國土の美を損つて行く惡いしかたである。

漸くにあの斜面の家の下に出る。それは木鉢を作る業の人が住んでゐるとの話だ。河原を見下すと、大き岩の手前に淀があつて、數人の子供が泳いでゐる。人を見ず、鳥の音は稀に、たゞ谿聲と岩と山と木とで終止した三時間の後に、この裸體の子供たちを見出した時は、身體も心も一度に弛んで來るやうな氣がする。道はやがて桑畑に沿ひ中津川の村に入つた。一番大きい棟が、宿となる幸島氏である。この村第一の豪家で、江戸時代には平賀源内の來たこともあるといふその家は、黑光りのする柱や、すばらしい一枚板の帶戸にも、棟下の柱に桁の縱横に打ちつけてある天井裏の構造にも、其の古さが見えてゐる。

米は一俵づゝ背負つてあの嶮路を運んで來る。米ばかりではない。すべての物資が人の肩によつて運びこまれるのだから、出す郵便にしても、落合まで一日置きに屆けるだけで、所謂配達といふことはしない。子供たちのはくゴム靴もそれ、マツチもそれ、そして村人は全く自給自足に近い生活をしてゐる。山の燒畑に蕎麥や豆をつくり桑を植ゑて養蠶をやり、麥を蒔いて飯米にし、玉蜀黍もかなり食べる。冬になると熊をとる。

「去年の冬は七匹とりました。三十五貫のがありました」

といふのでも、大體の生活が想像される。山に木は多いが搬出の方法がない、炭を燒いても運賃にかゝるから里に出すことが出來ない。この山里の周圍をつゝむ山は、すべて今利用價値を持つてゐない。たゞ交通の路一つ開ける日を待つてゐるのだ。產業は交通によつて生命を與へられ、生業は交通が開けた時に忽ち企業にまで進展して行く。故に今のところでは、繭を買ひに小鹿野商人が入り、天然の椎茸が横濱から支那

に出るといふ外は、これといふものもない。輕くて價の高いものだけが送り出されてゐるのだ。若しこの山の奥にまでさうした物質を搬出する道路が開けるならば、山の木も、木炭も、石炭も、一度に經濟的價値を生じて、目ざましい開發を見るのが常である。たゞ遺憾なことには、何れの山間でもさうだが、これら古代からの富を死藏してゐた倉庫の口が開けられる前に、その資源は乏しい生活をしてゐる住民の手から離れて、利にさとい少數の人に安く買ひ取られてゐる。だからその山の富を守り育てて來た人々は、急に吹きこんだ世間風に生活の程度は高まるが、既に手に一物もないといふ生活難に陷ることが多い。かうした奥地は、このまゝ靜かに山ふところにあらしめたいやうな氣もする。

こゝは千三四百米の山をめぐらしてゐるが、中津川自身が七八百米の海拔であるから、周圍はそれほど高く見えない。岩が少く河原も廣いその景觀は、奇岩怪石の重疊を想像して來たものには失望の地であるか知れないが、こゝに遊ぶことの興味は、中雙里からの嶮難とこゝの人生に存してゐる。鎌倉時代の初めに、下總國猿島郡の人幸島入道覺範によりて開かれたといふ言ひ傳へも、平賀源内が金・銅を採掘したといふ址も、甲斐・信濃・上野の三國へ川の源をたづねて峠路の存してゐることも、山間の地が平野の競爭から逃れて來た人の隱れ場處となることや、そこに藏した富源によつて開發されることや、谷が交通谷となる爲にその衝にある土地に聚落の出來ることなどを示してゐるやうに思ふ。更にこの境地を自然と人生の委として眺めるならば、電燈なく、ラヂオなく、自動車を見ぬ人々の靜かな生活をつゝむ夏の山嶽の美しさは今眼前にあるし、滿谷の紅葉の美も想像出來る。

山里は冬ぞさびしさまさりける
人めも草もかれぬと思へば

といふ冬の世界が暗く沈んで訪れたならば、その三月四月を世間から全く隔てられた時も思ひやられる。この中津川の冬にふさはしいものは、この村の子供たちが、凍雲の厚い空の下の夕暮の緣先に、かゞまつた赤い指を開いて鞠をつきながらうたふ鞠つき唄ではあるまいか。

おゝせさん
おせどつさん

ひちやくりどん

どうんどうんと
鳴る鐘は

くらいよくらいよ
雨だらう

雨でなければ
雪だらう



## 雪をまるめて

淋しい鞠つき歌が、とん〳〵とはづむ鞠音につれて流れる時、四圍の山々には冬木が淋しく立つてゐて、風にさそはれた雪が、谷間に暗いこの村の上にちらほらと散りはじめるであらう。

**金山のあと**　土地の開發は、そこに藏してゐる富源と開かれた交通と經濟界の狀態の三つに原因してゐる。中津川の支流神流川のほとりに開かれた金山を訪ふものは、かうした產業の盛衰をまざ〳〵と見ることが出來る。われ〳〵の活動は、第一に經濟界の動きに左右される。物資が生產されても高いものは買手がない。物資の價は交通の便不便によつて定まる。好況時代に興つた仕事が不況時代につぶれて行くのは、皆かうした事情に打勝てないためである。私はこゝに、わが鄉土に存する產業の一悲劇として、中津川の金山を說いて見よう。

試みに埼玉縣統計書をひろげて見ると、二六六頁に「鑛業及工業」といふ見出しがある。その「鑛業」とした欄を見ると、主なものは砂利と粘土と石灰岩とである。この「山の秩父」「岩石の秩父」を持つてゐながら、一つも有用金屬の產出を見ないのは、縣民としても誠に肩幅が狹いといふものだ。「和銅の年號を生みだした秩父よ、お前の地下には、何か金屬がありさうなものだ」と迷子でもさがすやうに尋ねて見ると、あつた〳〵中津川から北へと辿る眼は、はつきりと印した「金山」の二字を地圖の上に見出すのである。

ところが、「金山といつても金ではない鐵なのだ」と聞かされると、なあんだといふ氣になるが、われ〳〵の愛鄉心は、「鐵でもいゝ、鐵は日本に少いから大切だ」と、自分で言譯けして其の價値を大きく見るに違ひない。しかし今は全く廢坑になつてゐると聞いてはがつかりするではないか。

中津川の部落をあとにした私は、すぐにその後の山に登る小徑を辿つて、標高八五〇米附近で一つの尾根をまはり、神流川の右岸について山腹を行くと、昨日の途とはちがつて、岩は落葉の朽ちた土で厚く被はれてゐるし、木は大きい割合にすいてゐるから明るい氣持よい山路である。勿體ないほど太い檜が幾所にも棧橋になつてゐる。一抱もある木が徑の上に横たはつて朽ちてゐる。川を渡り、低い山を越えて暫く行くと、路は谷に下りて左から來る雁掛澤の落口をわたつて、右岸からまた左岸に移るといふ風に徒渉をつゞける。時には岩壁の下の一尺ばかりの石の廊下を、身を岩にすりよせて通る場所もある。

すると遙か上の方に板葺屋根が見える。それが金山である。濕つて苔にかぶさつた岩はすべりやすいから、足元に氣をつけながらゆくと、いきなり林がとだえて立腐れの長屋の前に出る。軒下まで草は伸びて、床板のやぶれからやはり青草が頭を出してゐる。屋根は何時のあらしに剝がれたか、ところ〳〵椽木ばかりが肋骨のやうに殘つてゐる。

鑛石を落したところと見えて、上の山から赤紫の磁鐵鑛がが〳〵と崩れてゐる所がある。そんな下を通つて行くと、伸びきつた夏草の中に、蜒々と峯によぢ谷をわた

つて、秩父線皆野の驛までつゞいてゐた索道がある。尺角の杵木の根元が朽ちて、赤錆びた鐵索にすがつて漸く立つてゐる。永遠に物を盛ることのないバケツが、空しく宙にかかつてゐる。動力室もやはり立腐れである。

橋板がすつかり落ちて桁ばかり殘つた物凄い橋をわきに見ながら、一溪をわたると、鐵鑛を熔かした建物がある。火に燒けて赤い土間の砂に、金糞が一ぱいまじつてゐる。崖の上の留守居の家には、庭に眞白い方解石の砂がしいてある。

私はそこで眼の前の荒廢してゐる熔鑛所や、谷から峯に櫓を立てて這ひ上がる索道を眺めながら、こゝの盛んであつた昔を想像して見た。谷に漲ぎる熔爐の煙、トロの走る音、向ふの山の肩の鑛脈の露頭には蟻のやうに鑛夫がたかつて鶴嘴をふりあげるのが見えたらうし、そこの屋根の破れた鑛夫小屋には金掘唄が賑やかであつたらう。

菜畑にはだら雪ふりすれすれに索道の線
のたるみたるかも
枯草にこやりてあれば空青し索道の線の
太く横ぎる
（前田夕暮――原生林）

そして大きいバケツに銑鐵をつんだ索道は、人もゐない山から谷を七里も越えて行く轟々たる響を立てたに違ひない。鑛夫は千人にあまり、小學校さへもあつたといふこの金山が、今は一筋の立上る煙もなく、わづかに小鳥の聲がするのみである。青草離離とでもいはふか、山は山に重なり谷は谷を生んで奥深いこの山奥の土地が、赤い錆びが地にしみこんだまゝ、破れ朽ちた家々と一所に夏草の中に殘つてゐる。

歐洲大戰時の鐵の値段がこの金山を開いた。そこでこゝに働く一千の鑛夫の日用品を運ぶために、小鹿野町から三田川村を通つて、上り四時間の八町峠を越える山路が開かれ、馬の背によつて米や野菜や味噌がどん〳〵と金山へ送りこまれた。しかしその交通線では足りないとなると、十何萬圓かをかけた索道がこゝから皆野の驛にまで架設された。その索道さへも空しく錆びる今日に於ては、八町峠の道が荒れてしまつたのも無理はない。金山から出たばかりはやゝよいが、數町を行くと殆どいばらと草の中に埋れてしまつてゐた。

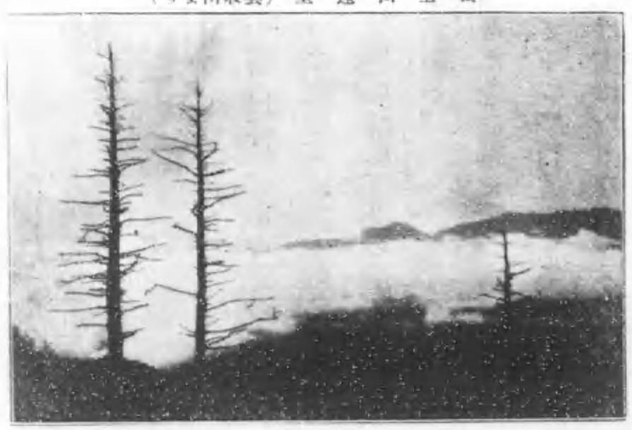
**八町峠の上**　私はこの荒廢した小徑を喘ぎながら急いだ。その路は雁掛峠、赤岩峠

から八町峠につゞいてゐる一三〇〇米から一五〇〇米に及ぶ山々の峯近い腹をうねつて、八町峠の頂の肩に出るのである。右の深い谷をこえて、七つばかりの峯が鋸の齒のやうにつゞいた兩神山が、一六〇〇米から一七二三米の高さをもつて、すぐ前に見えてゐる。

澤を越える度に水を呑んだ。路がまがるところでは木苺を摘んで食べた。さうして一時間ばかりで峠の上に登つて、はじめて三田川の谷を眺めた時の快さ。私はあの時を今でも忘れる事が出來ない。まづ水筒を傾けて握飯の包を開く。赤黑く色のついた燒きむすびの中から赤い梅干が一つ、まはりの飯粒を染めて出て來る。その酸味と鹽氣を味はひながら、私はひねこびたつゝじの株に腰かけて眼の前の谷を見下した。前の樹の枝にはさるのをがせが乾いた薄綠の絲をぼう〳〵とさげてゐる。足下からぐつと切つ削いだ斷崖で、それが落ちつくしたところに、蓬萊のやうな形のよい山がある。左は峠の頂から北面に走る山の背が遙か下になそひに落ちたところに、家が二三軒畑が五六枚、明るい空の下に靜かに小さく置いてある。地圖を見ると志賀坂峠の向ふの群馬縣の部落であるらしい。石灰岩らしい鐘狀の頂を二つ並べた二子山をこして、平らかな土地が霞んでゐる。その遙かなる靄の中に白く引いたのは大利根の流ではあるまいか。頰白が鳴く。こんな山の上に頰白が鳴く。そして三田川の村は、この桶の底のやうな谷底にあるらしい。

いよ〳〵その三田川の谷に向つて峠を下らうとした時、私は二日を樂しく辿つた中津川の谷に最後の一瞥をなげて別れを告げた。金山はその荒廢をつゝんで、靜かに谷底に休らつてゐる。それをかこむ山の深い翠の波うつ峯々、それが近いのは靜かに遠いほど淡く疊なはつた二十重の彼方に、波濤を見わたす岩根かの如く聳えるのが甲武信嶽であるらしい。私はこの數十百の山々が悉く甲武信に向つて押寄せるやうな氣がした。また甲武信の

富士山遠望（雲取山より）



一聲に、見えるかぎりの山々がひたと鳴りを靜めたやうに見た。自然の大なる姿と心とは、八町峠のこの頂に立つて知ることが出來るのだと思つた。富士山はその氣魄を感ずるには餘りにやさしい姿を遠い空に見せて居る。

## 四　三田川の谷

**立上る煙**　はすべて人間の生活に伴なふものである。一筋の煙はどんな野の中でありつてもそこに人が住んでゐることを示すし、朝の煙は家々の飯の支度だと知ることが出來る。煙の數が多くなればその土地は繁昌であるし、煙突の煙は工業の姿である。煙の下には人の生活がある、人の活動がある、人の生産がある。

踵半分の大きい肉豆を作りながら、私は澗れ澤にからんだ急な路を下つた。上りは四時間もかゝるといふ八町峠の路は、全く一息に谷底まで下つて行くのである。或る時代には中津川の谷のやうに木が茂つてゐたらうが、今は丈にたりない雜木のひこばえばかりで、その斜面をわける路には岩かけがから〳〵してゐる。肉豆を氣にしながらなるたけ踵に力の入らぬやうに足を地に下ろすのだが、なにしろ下りが急なのだから始末が惡い。

やう〳〵半ばを下つてあの蓬萊山のやうな岩の根本に來たら、冷めたい水が岩根からほどばしつてゐた。手にすくつて飲むと齒ぐきが痛いほどである。それからしばらく下つて入つた明るい雜木林のかげの涼しさ。そこを出ると大きい岩が徑に被ひかぶさるやうに立つてゐて下に小さい叢祠がある。立ててある赤旗はもうさめきつて文字もわからない。山の神か水の神かしらないが、ほどなく終らうとする山の旅の無事を謝して行きすぎると、赤肌になつた山裾に一筋の煙が立つてゐる。それが八町峠を越えてからはじめて見る人間の存在のしるしであつた。白い煙は、晝下りの日を一ぱいにうけた谷の岩かげからうす〳〵と立上つてゐる。

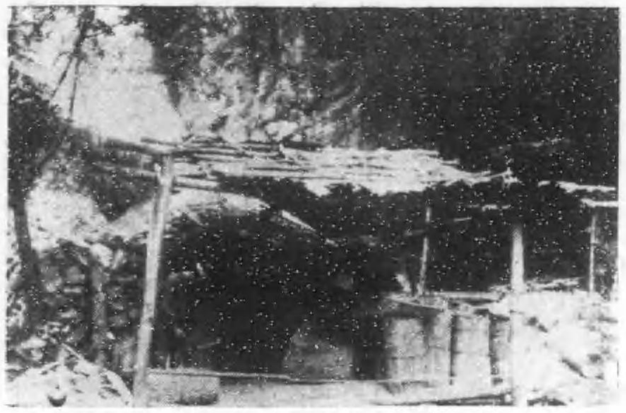
山裾の小さい平地に出ると、それがはつきりと炭燒きの煙だといふことがわかつた。見

ほの青く空にあがれる炭竈の煙しづかなる谷の夜あかり

（前田夕暮――原生林）

れば瀧を爲してゐる溪流の向ふ側に、こゝでも炭を燒いたのだといふ風に、まつ黑い大きい口をあんぐりとあけた竈が腹の中を見せてゐる。

まるで燒あとやうな山裾の小さい平地を通つて、山の尾根から雜木の細いのを伐りおろしてゐる下をすぎると、さつきの炭燒竈の前にすぐ出た。わきに小屋がある。竈の前に立止る。竈は高さ一間ばかり方一間半もあらうか、土と石とで築き上げられて、上部の小さい穴から白い煙を吐いてゐる。竈の肌からはかげらふが立ち、私の立つてゐる大地までほてつてゐる。



炭燒がま

物珍らしさうに小屋の中から子供が出て來た。手も顏も黑い青年が出て來た。そして最後にその母らしい人が炭俵編む手をおいて出て



來た。私は雜囊の中に殘つてゐた菓子を出して子供たちにわけて、いろ〳〵と炭燒きの生活をたづねて見た。あの峯の木が伐つて谷に下ろされ、この竈の中で燒かれて茅で編んだ俵に詰められ、この山中の谷底から出てわれ〳〵の家の火鉢の中でまた赤くなるまでには、さま〴〵な人間の生活にふれるものだと思つた。

第一に興味のあるのは炭一俵の値段である。これはどこで出來た炭でもかはりはない。この秩父の地方では、他の生業が少い山間の村が最も多く燒いてゐるが、さうした大瀧村のやうな交通不便の村の炭も、秩父町の隣で出來た炭も、質さへ同じなら、一俵を木炭同業組合で檢査して五十五錢に仕切られたとする。同じ物が同じ價なのは當然だからである。さうなると炭燒山を持つてゐる山主や、この炭燒きをする人々の收入といふものは、全く交通の便不便に左右されてしまふことは表の通りである。つまり物價の多くは生産費によつて定られるものではない、市價がまづ定つてから生産

炭俵ひそ〳〵と編める人妻は日向のかたをみかへりにけり

（前田夕暮――原生林）

費が出て來る。だから餘り炭の値段が安すぎると生産者は馬鹿々々しいから燒くのを止める。止めると市場に品薄になるから市價が上がる。上がるとまた生産者が燒きはじめるから品が多くなつて來るといふやうに動いて行くが、炭のやうな必需品は需要がきまつてゐるから、ある程度よりも下がることがないし、また方々で生産されるから、あまり高くなる事もない。

| | | |
|---|---|---|
| 55錢（大　滝） | 中雙里——落　合 | 二〇錢 |
| | 落　合——秩　父 | 一五錢 |
| | 俵 | 五錢 |
| | 檢査料 | 一錢六厘 |
| | 炭燒賃 | 一〇錢 |
| | 山主木代 | 四錢四厘 |
| 55錢（三田川） | 峠　下——三田川 | 二錢 |
| | 三田川——小鹿野 | 七錢 |
| | 俵 | 七錢 |
| | 檢査料 | 一錢六厘 |
| | 炭燒賃 | 二〇錢 |
| | 山主木代 | 一八錢四厘 |

するとこれがまた山の地價に影響する。交通便利な三田川の山主は木代が澤山入るから山の地價が高いし、大瀧では木代が安いから、山も隨つて安いといふことになる。だから山の中でもよい道路が出來ると安い運賃で運び出せることになつて急に山主も炭燒きも收入が增すし、山の地價も高くなることは、浦和あたりが省線電車が通ることになると地所が高くなるのと少しもかはりはない。この炭の粉にまみれて働いてゐる人達も、かういふ經濟の理から離れることは出來ないのである。この竈で一度に二十俵を燒くとすれば、この谷川を前にした一家の收入は四圓であるが、山から木を伐つて、下ろして運んで、燒いて俵につめるとなると二人で働いても三日はかゝらうし、山に木が無くなるに從つて谷深く入らなければならないから仕事がやりにくくなるので、炭一俵も中々やさしい事でない。

炭の搬出（索道）

**秩父の木炭**　私はこの純な青年の話をきいてから子供たちに「さやうなら」をいつてまた谷に下りて行つた。氣がつくと、向ふの山の肩からも白い煙が上つてゐる。平坦な地方では炭燒を冬の暇な時にやるが、かうした山の中では夏でも燒くのである。この大きい秩父の山々に、今日も何百條の白い煙がほそ〳〵と上つてゐるのだ。そして八四萬俵、三四〇萬

貫に餘る炭が一年に產出されるのである。これをトラックに積むと約八千五百臺、熊ケ谷から浦和までつゞくほどの長蛇の列が出來るほどだ。

しかしこの驚くべき大量の秩父の木炭も、埼玉縣全體で使ふ炭の三分の一に過ぎないのだ。われ〳〵の家で使ふ炭俵の荷札を見てその產地をしらべ給へ。栃木の那須から、福島、岩手の遠い地方までがその供給地であるのだ。比較的交通の便のある土地の木材は價が高いから、秩父地方の山は炭よりも材として伐出せるものが多い。隨つてさうした土地の炭は原料が高いから價も高いといふことになる。要するに秩父木炭は高いから東京からの需要は少ないと見てよい。

炭の產地の分布もこの理にしたがつてゐる。次の表は埼玉の木炭產地を十位まで示したものであるが、交通の不便な大瀧村に木炭の多いのは、その面積が大きいこと、その交通が不便なこと、したがつて材料の安いこと、他の仕事が少ないことなどが主な理由であらうと思ふ。秩父の木炭は皆小鹿野町と秩父町に出される。

諸君は、そこでも一度自分の家の木炭を見給へ、それには白い粉をふいたカン〳〵



する白炭と柔か目の黑炭とがある。秩父は元來堅炭(かたずみ)で通つた土地であるが、最近は一般の家庭が火つきのよい黑炭を好むところから、この地方の木炭は大分不利の地位に置かれるやうになつた。火が強い火持ちがよいとゐばつたところで、使ひ手がいやだといへば仕方がない。そこで秩父でも今までは全產額の一割に過ぎなかつた黑炭製造を、しきりに增加させようと努力してゐる。生產が需要者の好みに指導されるといふことは、木炭のやうなものにまで例外なしに行はれてゐるのだ。

木炭產出順位

| | | | |
|---|---|---|---|
| 1 | 秩父郡大瀧村 | 122.0 | 萬貫 |
| 2 | 同　浦山村 | 37.5 | 〃 |
| 3 | 同　兩神村 | 17.4 | 〃 |
| 4 | 入間郡吾野村 | 15.9 | 〃 |
| 5 | 秩父郡梭川村 | 6.7 | 〃 |
| 6 | 同　倉尾村 | 6.6 | 〃 |
| 7 | 同　中川村 | 6.5 | 〃 |
| 8 | 同　金澤村 | 6.2 | 〃 |
| 9 | 入間郡名栗村 | 4.7 | 〃 |
| 10 | 秩父郡長若村 | 4.4 | 〃 |

**三田川の村**　から小鹿野の町へかけての谷は、水蝕の爲につくられたものでなく、一つの地溝に添うたものである。南の山も北の山ももはや峽谷といふ形はつくらないで、明るい山村を靜かにその間に置いてゐる。河原澤川の流がその谷間を淺く流れて、岸に見える岩の

數も少い。もはや斷崖といふやうな岸はなく、川は家々の軒先を流れて、村の人々と朝夕に親しんでゐる。時が夏であつたから、谷一面の畑には桑がしげり、家々の中からは蠶糞の臭がぷんとして、時には座敷の蠶棚のまぶしの中に白い繭が見える家もあつた。そしてこの山村の子供たちは、家の前の淺い川の水にひたつて、蛙のやうに泳いだり、水玉をはねちらしたりして嬉々として夏の休みを樂しんでゐた。谷の開いたところは、桑畑がひろがり、狹まつたところは、川岸からなそへに上る山裾に杉林が茂つてゐた。時には畑が山の腹までひろげられて桑が植ゑられてゐる。

秩父は山の國であり谷の國である。そしてその谷は悉く養蠶を生業とする農家で滿たされてゐるといつてよい。しかし畑が少ない上に地が瘠せてゐるから、桑のしげり方も少く、繭の產額は縣下第六位である。

道はゆるい傾斜をもつて川にからみながら平坦を求めて行く。さつきまでの峠道にくらべると、これは極樂の道である。幾度か川を渡る。製材所や、丸木を並べた道を橇のやうな運木臺に徑二尺に近い杉材を載せて走らせてゐる人々を見た。時々機を織る梭の音がきこえる。のぞつこみして見ると、銘仙の布團地を織つてゐる。狹い家は川岸に高くのぞんで、爐があり、緣があり、緣には欄干がある、その一間の座敷に機臺をすゑて三十近い女が織つてゐる。その妹らしいのが緣先で絲卷きをしてゐる。不景氣のせいかあまり明るい樣子ではない、唄も出さずにせつせと織つてゐる。でも秩父らしいと思つた。

それからしばらく歩いて、私は一つの製絲工場を路の右側に見つけた。木の香の新しい亞鉛葺の一棟を明るく硝子窓でとりまはして、數十の工女が盛に絲をとつてゐる。絲は釜の中の繭を浮かしたり沈めたり踊らせながら、銀線の走る如くに上つて、工女の頭上の取枠に銀白の幅を卷きひろげて行く。カラ〳〵と枠のまはる音ばかりがして工場の中にはさゝやきの聲さへもない。

**秩父の繭**　は主にかうした小規模の工場で絲になる。標札には埼玉社三田川村何々分工場と書いてある。埼玉社といふ組合の製絲工場なのだ。秩父の製絲工場は、その土地の繭を共同でその土地で絲にするのが特色であるから、このやうな小さいものが

全部に二千三百もあるが、蠶絲の產額は、たつた六十七の工場きり持たない兒玉郡の五分の一である。產額の少ないのは、土地の繭がひき終ればそこで休むから、一年の繰業日數が少ないためでもある。いはゞこゝの製絲は養蠶をやるお百姓自身の製絲工場でやるが、他郡のは資本家の經營する大工場で絲になる。だからその工場は他府縣人の手になるものが多い。秩父の繭は秩父の人の手で生絲になるといふことは、この土地の一つの誇であると思ふ。

| 蠶絲 | 郡名 | 工場數 | 產額 |
|---|---|---|---|
| | 大里 | 五〇八 | 七、一〇八、四六五圓 |
| | 兒玉 | 空 | 五、七〇一、八七三圓 |
| | 北足立 | 二 | 五、三七四、〇八七圓 |
| 絲 | 入間 | 一、三二七 | 二、八一〇、三七二圓 |
| | 秩父 | 二、三〇二 | 一、一三二、〇三三圓 |

この生絲の行先はどこ、主に輸出である。秩父銘仙が秩父の生絲を原料にしてゐないことは、少し妙なやうであるが、聞いて見るとやつぱり道理がある。輸出絲と內地向の絲とは違ふ。これがその理由の第一である。すると秩父では、內地向の絲が少ないことがわかる。第二は織物の原絲にする爲の撚絲工場が少ないことである。秩父といふやうな一地方で撚絲をやつたところが、幾つもの絹織生產地を控へた前橋あたりのそれと競爭が出來ないから、この土地に撚絲業者が少ない。そこで秩父銘仙は前橋の原料で織るといふ成行になつた。それでよいのだそれでよいのだ。それが自然に生れた經濟の合理化なのである。

小鹿野町

**小鹿野から國神へ**　川向ふ地が日影、北側が日向、地名は面白いものだ。兩側から川に山が迫つて來ると一反地といふ土地がある。軍平は古戰場のあとか間明平には古杉にかこまれた嚴かな社が見えた。名物の柿の木が多い。

| 秩父の柿 | | |
|---|---|---|
| | 長若村 | 一七九、六〇三 |
| | 尾田蒔村 | 三四、八〇〇 |
| | 原谷村 | 三五、〇〇〇 |
| | 高篠村 | 一五、五四三 |
| | 太田村 | 一四、〇〇〇 |

三田川の谷から出た河原澤川が、兩神の谷から出た薄川と一しよになる所から赤平川になつて、そこに小鹿野の平坦部がひらける。秩父盆地の中央丘陵と外圍の山塊との間に造られた二

つの平坦部、一つは秩父町を生み一つは小鹿野町を育てた。小鹿野の町は三田川と兩神の二つの谷口の町である。平坦部が小さいので到底秩父町には及ばないが、夕暮に見た町の様子はかなり落着のある住みよい土地らしかつた。まはりに稻田が開けてゐるし、後の畑につゞく丘陵の上には櫻が植ゑられたといふ話も氣持よかつた。

赤平川の流について小鹿野町から坦々たる道を東へと歩いて行くと、吉田町をすぎて、ほどなく赤平川と荒川とが出合ふ。そこに街道筋の北の山一重にある倉尾・矢納・日野澤の谷が口を開いて、吉田の町と國神の村がその衝に當つて榮えてゐる。この秩父盆地の口にあたり、一方には峠越しに兒玉町や群馬縣の鬼石町に行ける交通線を持つ國神村が、古くからこの盆地の中心をなしてゐて、知知夫彦の命の墓と傳へる古墳を存してゐるのも當然である。

| 椋神社 | |
|---|---|
| 社格 | 縣社（延喜式内） |
| 所在 | 秩父郡吉田町 |
| 祭神 | 猿田彦命 |
| 例祭日 | 十月五日 |

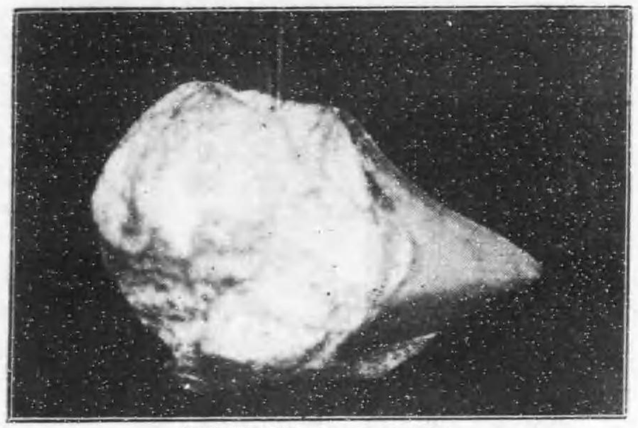
## 五　秩父の自然

**大自然の力**　これで秩父の旅は終つた。私は再びこの盆地の口に立つて、煙霞にかすみつゝ殆ど等しい高さに盆地をとり圍んだ周圍の山々と、その中にたゝなはる中央の丘陵と、それをめぐる荒川・赤平川の二つの流を眺めて、わが心にうつつた秩父について考へて見た。そのすぐれた景色、山の人々の生活と產業、その他いろ〳〵の事柄にふれて來た私の心は、この時、ふと大きな思にまでぐんとぶつついて行つた。それは秩父盆地そのものを造り上げた大自然の力であつた。秩父の土地は、この大自然の力によつてこの姿を私の前に現はしてゐるのである。

**地質を語る**　私は數千年の昔からたえず鑿を振つて、この秩父の地殼をえぐつてゐる赤平川の岸に下り立つた。青澄んだ水と、その水のすきとほつた渦のかげをとほして、ゆがみながら水とたゝかつてゐる河底の岩石の牙をながめた。それは地質の方で第三紀の水成岩にいれてゐる砂岩や泥板岩や、時には小石をつぶ〳〵と見せてゐる礫岩である。

これらの岩石は、皆海底に出來上つたものであると學者はいふ。秩父山地のまん中

に海成の岩石といふとやゝ不思議な感がするが、不思議に思ふ人は、もし鐵槌があるならそれを振上げて河岸の岩を缺いて見るがよい。鐵槌がかいた新しい岩の破面に、意外にも貝の化石や蟹の化石が出て來るであらう。もし鐵槌がなかつたなら、河水がよどんで砂をあつめたあたりをさぐつて見るがよい。すると、稀には立派な貝の形の化石がそつくりと手にさはることがある。



天狗の爪（鮫の齒化石）

貝の化石が出るのは、この岩の出來たときに、そのあたり一面が水の底であつた證據である。この秩父が水底だつたとは、夢のやうにふしぎな事實である。その上にそれが湖の底ではなくて、海底であつたとすれば、この眼前に青垣なす山々の上に洋々と潮がわきかへり、この盆地の中にいろ〳〵の魚類があそんだのである。いま私の腰かけてゐる岩がその底の砂であつて、頭の上には、碧玉のやうな海水の深い中を、鮫や鯨が泳いでゐたのである。君等はこれを單なる空想だと思つてはいけない。實際にこの秩父の化石の中には立派な鮫の大きい齒もまじつてゐるのだから。



**滄桑の變**　といふことばを支那人はよくつかふ。「桑田變じて海となる」といふことなのである。かうした大地の驚くべき變化が、いま眼の前の化石で證據だてられた。そして秩父の土地がわれ〳〵人間の世界になるまでには、幾度となくこの滄桑の變がくりかへされた。地球の表面の變遷がたび〳〵このあたりを海底にまでした。

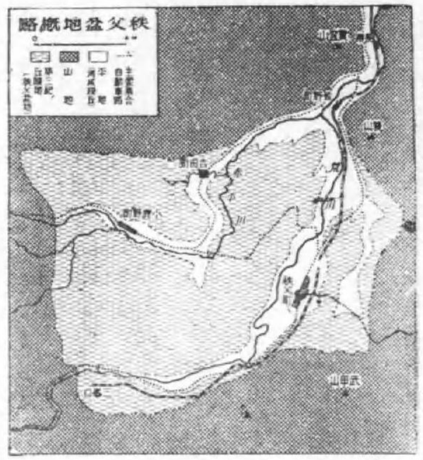
話はむづかしくなるが、私はもすこし秩父の土地について、地質の方の學者たちの說明をきいて見ようと思ふ。彼等はいふ。「秩父地方は岩石の貴い標本室である」と。どうしてその標本室は出來上つたのか。

**秩父地塊**　夕日の光がちぎれ雲を染めてこの秩父の山々のかげにはいつていつたあと、まだ空は名殘の夕燒が明日の天氣のよいのを告げて、村の子供たちの口々に「夕燒け小燒け」がうたはれるころ、平野に住む人たちは丘の上に立つて、この夕空の下

の秩父山を望んで見るがよい。紫ににほふなつかしいその姿は、東べりの山々の頂きがほゞ平に並んでゐて、それよりやゝ高く、左に兜の鉢のやうな武甲の山、右に鋸の齒のやうな兩神山のかすかなる影を見ることが出來る。そして三峰から甲武信岳につゞく山々が、高くその西につゞいてゐる。

更に參謀本部の五萬分の一の地圖をひらいて秩父大宮・三峰・萬場の三枚を調べて見ると、上のやうな表がつくり出される。ほゞ菱形をなしてゐる秩父盆地をかこむ山々の頂きは、金峰山や國師岳を背景にした、甲斐・武藏・信濃の國境に立つ二四八三米の甲武信岳を最高點として、だん〳〵に東方にゆるい傾斜をつくつて、その東北の隅がもつとも低くなつてゐる。かういふ有樣は、これらの山山の頂きをつゞけた線のかこんでゐる平面が、むかしそこにあつた平原を想像させるもので、秩父山地はかつてあつた一つの準平原であることを示してゐる。

**盆地は成る**　昔、それは昔といつても五百萬年も一千萬年もの昔である。こゝに一つの平原があつたが、その周圍に大きい割れ目が出來て、菱形のこの土地だけが高く殘つてしまつた。




秩父山地は南は相模川の上流の道志川の谷、西は大斷層、北は神流川の谷、東は秩父地方の東邊をなす斷層、この四つの斷層にかこまれてゐる。

その上に、この臺地のやうに殘つた高地の中には幾つもの大きい割れ目が出來たり、厚い岩盤が皺をつくつたり、割れ目から岩石が噴出したらしいが、中でも大きい割目は小鹿野町の西の三田川村の谿谷をなす東西の溝で、長野縣にかけて山中地溝帶といふものをつくつた。また赤平川と荒川にかこまれ、小鹿野町から三峯登山口の贄川に引いた線を西の

境とする秩父盆地が、大きい斷層によつて落ちこんだこともあつた。

その上に、幾度かの地變はこの地方を或は海底とし、或は隆起させるやうな事があつたので、その低い場所には砂がたまり粘土が積んで、今日澤山の化石をふくんでゐる海成の砂岩や粘板岩を地表にのこしたのである。ある時代には、秩父盆地は大きな湖となつたかもしれない。その水は國神や野上の土地をとほつて、寄居町から東に落ちたであらう。それがだん〳〵と岩石の割れ目を削つて行くと、今日の荒川の谿谷が出來て、象ケ鼻の絶景やら樋口から長瀞までの美しい岩のながめと水の流れとをつくりあげると一緒に、盆地の底だつた土地があらはれて來た。

**水力を讃へよ**　かういふやうな變化をこの土地がうけてゐる永い〳〵年月の間に、一日も水の浸蝕の力がはたらかない日はなかつた。盆地をかこむ土地はその小さい割れ目からどん〳〵と削られて、幾つもの谿谷と横谷とが數多の山峯の形を成し、盆地の上を被うてゐた岩石もまた刻まれて、波のやうに起伏する丘陵をつくつてしまつた。

水の力は谷をえぐり山をきざんだだけではない。山から運んだ岩石の破片を流れの



ゆるやかに廣い場所をえらんで積んでいつて、そこに平な土地を造りあげる。すると更に流れはその平地を深くえぐるといふ風になつて、河岸には段丘をなす幾つかの平地がのこされて行く。秩父の人たちが平坦部といつてゐる秩父町附近の平地も、小鹿野町附近の平地も、河添ひの村々の平地も、さうした水の力でつくられたのである。

私は白川村の白川橋の下の河原に遊んだことがあつた。小學校の前あたりから、粘土の固まつたやうな岩の細かい破片をざく〳〵と踏んで、足先が靴の尖につまるやうになる急な坂路をうねり〳〵下りて行くと、谿谷を出たばかりの荒川の激流は、白い釣橋の下をくゞつて、いきなりそこに廣い河原をひろげてゐる。水のほとりに出ると、河原から屏風のやうに立つた向ふ岸が、三段の段丘をなしてゐる。左の二町ばかり下にある大きい河原も、いつかまた河瀨の低下につれて、第四の段丘をつくることであらうと思ふと、前にいつたやうな水の力は、今日でも一時も休むことなしに働いてゐるのである。

**岩石の秩父**　秩父の地方はかくの如き複雜な地殼の歴史を持つて、今日の姿につく

り上げられた。この複雑さと變化の甚しさとが、この土地を「岩石の標本室」にまでつくりあげたので、その粹をあつめた長瀞は天然紀念物に指定されてゐる。秩父には地殼の生成から今日までの種々の岩石が、簡單に眺められるやうに露出してゐる。

秩父の岩石

| 名稱 | 種類 | 化石 | 地質時代 |
|---|---|---|---|
| 三波川層 | 綠簾絹雲母千枚岩、絹雲母石墨千枚岩、斑點綠泥角閃片岩、斑點石墨絹雲母片岩、黑雲母片岩、赤鐵鑛片岩、紅簾片岩、絹雲母片岩、石墨絹雲母片岩 | | 始原代 21km |
| 御荷鉾層 | 主に暗綠色の角閃岩（稀に輝岩）種々の千枚岩、硅岩（稀に結晶質石灰岩） | | 古生 km |
| | 硬砂岩、粘板岩、炭質粘板岩及石炭 | 海百合、珊瑚 | |
| 秩父古生層 | 輝綠凝灰岩、硅岩、角岩、石灰岩、ラヂオラリヤ板岩、輝綠岩岩床 | 蟲、フズリナ | 代 13 |
| 中世紀層（山中地溝帶層） | 砂岩と粘板岩の互層　礫岩をまじへてゐる | （下部）植物化石、貝化石　（上部）三角介アンモン介 | 中生代 4km |
| 第三紀層 | 海成の砂岩、泥板岩、礫岩の累層 | タイアレラ其他の貝化石　鮫の齒化石　植物化石 | 新生代 1km |

**山の人生**　かうした岩石と地質とが、秩父人の生活に大きい關係を持つてゐることはいふまでもない。豐富な石灰石を利用するセメント工場は、武甲山のふもとに煙をみなぎらせてゐる。蛇紋岩と石灰岩とがまじつて出來た蛇灰岩は、俗に鳩糞石といは

れるが、どうして磨き上げると美しい裝飾石材になる。この土地の大理石もそろ〳〵帝都の建築に用ひられて來た。この外に庭石として面白いものが多いばかりでなく、道路と建築になくてはならない本縣の砂利は悉く秩父山地が供給するものであることを忘れてはならない。平野に住む人にも、直接さうした山のめぐみに浴してゐるのだ。

山を利用しては植林と製炭があり、水を利用しては發電と灌漑がある。秩父は埼玉に於ける唯一の發電地帶であるのも、さうした地形のめぐみである。こゝに源を發する荒川の水を外にしては、縣の中央の水利を考へることは出來ない。秩父の桑畑はその段丘の上に發達してゐる。それら砂利層を下に持つ段丘が乾きやすくて外の作物には適さなくも、桑の發育には差支ないからである。たゞ淋しいのは前に述べたやうに鑛產のないことで、昔の和銅の土地も、今は一塊の銅も生產してゐないが、これもどんな廻り合せで何處に芽をふくかも知れない。現に私がこれを書いてゐる中に、ある人の手によつて、三田川村から索道を架けて金山の復活を企ててゐるとか、大瀧村から金が出るとか新聞が報道してゐる。

## 六　暮靄の中に

**秩父を去る**　に當つて、この五日を谿聲と青嵐と巨岩と藍峰の中に暮らした私は、幾度か頭をめぐらしてかすんで行くその地を眺めた。中津川の谷に入る私を送り、三田川の谷から出た私を迎へた武甲の峯は、いま暮靄のかげに暮れて、盆地の波うつ丘陵の裾邊にちらほらと灯が見えて來た。三千年の昔から祖先が住みなれて來たこの土地に、十一萬の人々が、一日の仕事を終つて樂しい夕食にむかつてゐるのだ。その人人の日々營々の極めて一部分だけをながめた私は、まだ〳〵見たい幾つもの事があるやうに思はれて、車窓の人となるのが殘り惜しくてならない。もしゆつくりと出來る日を持つなら、更に數々の秩父の生活にふれることが出來るものを。

その中でも心殘りするものは、國神村の國神塚と野上鄕の石塔婆である。秩父郡の古墳は秩父町から北東、國神村から東の平坦部と峽村とに主に散在してゐて、原谷村には四十八塚の名が存してゐるが、國神塚は中でも有名で、知知夫彥命、知知夫姫命

の墳とつたへられる地である。かうした古墳の數々は秩父の文化の初まりとその開けた場所とを、われ〳〵に教へる貴い先人の遺蹟である。

**靈場の數々**　山秀で水清き土地は、自然に人の心を淨めてそこに宗教的な心をやしなつてくれる。私たちはこの美しい秩父の土地に、祖先の人たちのさうした心のあとを幾つも求めることが出來る。秩父神社と三峯神社は勿論のこと、長瀞のほとりには日本武尊にゆかりのあるといふ寶登山神社がおごそかに山上に鎭座してゐるし、吉田町の椋神社は天孫降臨に御先導申し上げた猿田彦神を祀る延喜式内の古社である、また寺の方には名高い秩父三十四番の靈場の

橋立寺

野上石塔婆

秩父郡樋口村
秩父青石の大板碑
應安二年己酉十月日の銘
高　五・〇二米
幅　一米
內務省指定天然紀念物



あることを忘れてはならない。室町時代にはすでに名を存してゐたといふ觀音道場の數々は、この山河の間に祀られて、素朴な心で後世を希ふ老翁老媼の群々が、或は春の日長にその鈴の音をあちらこちらにひゞかせ、或は紅葉の照る秋をまごころこめて巡禮してあるいたのである。それは四國巡禮や西國三十三番の巡禮のやうに、海に山に幾つもの國々にわたつてめぐり歩くものに比ぶべくもないが、そのかはりに農閑の時期を見はからつて、三四日の泊りを重ねるだけで朝夕馴れてゐる鄉土の村々を廻るのであるから、心安らかに勞も少いといふすぐれた點もあつた。今も若葉にほとゝぎすの鳴く山ふもとの道を、又は夕日に高峯の紅葉が照るあたりを心靜かに足をはこんで、苔むした石磴を上り、木目も高い御堂の柱に巡禮札を打つゆかしさが絶えない。

| | | | |
|---|---|---|---|
| 第一番 | 妙音寺 | 高篠村大字杓谷 | 四萬部寺 |
| 第二番 | 眞福寺 | 同　村大字山田 | |
| 第三番 | 常泉寺 | 同　右 | 岩本觀音 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 第四番 | 金昌寺 | 同右 | 荒木十一面堂 |
| 第五番 | 長興寺 | 横瀬村 | 語歌堂 |
| 第六番 | 卜雲寺 | 同右 | 萩の堂 |
| 第七、番 | 法長寺 | 同右 | 牛伏堂 |
| 第八番 | 西善寺 | 同右 | |
| 第九番 | 長興寺 | 同右 | 明智寺 |
| 第十番 | 大慈寺 | 同右 | |
| 第十一番 | 常樂寺 | 秩父町 | 坂氷觀音堂 |
| 第十二番 | 野坂寺 | 同右 | |
| 第十三番 | 慈眼寺 | 同右 | |
| 第十四番 | 金剛寺 | 同右 | 今宮坊 |
| 第十五番 | 少林寺 | 同右 | 〃 |
| 第十六番 | 西光寺 | 同右 | |





| | | | |
|---|---|---|---|
| 第十七番 | 定林寺 | 同右 | |
| 第十八番 | 神門寺 | 同右 | |
| 第十九番 | 龍石寺 | 同右 | |
| 第廿番 | 岩ノ上堂 | 尾田蒔村大字寺尾 | |
| 第廿一番 | 觀音寺 | 同右 | 矢ノ堂 |
| 第廿二番 | 榮福寺 | 同右 | 童ノ堂 |
| 第廿三番 | 音樂寺 | 同右 | |
| 第廿四番 | 法泉寺 | 秩父町大字別所 | |
| 第廿五番 | 久昌寺 | 久那村 | 久那岩井堂又御手判寺 |
| 第廿六番 | 圓融寺 | 影森村大字下影森 | 岩井堂 |
| 第廿七番 | 大淵寺 | 同村大字上影森 | 月影堂 |
| 第廿八番 | 橋立寺 | 同　同 | |
| 第廿九番 | 長泉院 | 中川村大字上田野 | 笹戸觀音 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 第卅番 | 寶雲寺 | 白川村上大字白久 | 般若堂 |
| 第卅一番 | 觀音院 | 三田川村大字飯田 | 若水寺 |
| 第卅二番 | 法性寺 | 長若村大字般若 | |
| 第卅三番 | 長福寺 | 吉田町 | |
| 第卅四番 | 水潛寺 | 日野澤村大字下日野澤 | |

これらの寺々には、今も御詠歌の聲が、チリン〳〵と鳴る鈴の音にまじつて響くのである。

**古人の迹**　眉に近い山々は紫に暮れて、砂利の白い線路のうねるほとりに、信號燈が青くついた。もうほどなく電車がその窓一ぱいに明るい灯を見せて走つて來る時間になつてゐる。私の秩父の旅はこの夕で終つて、秩父のすべてが思出の中にしまひこまれようとするのだ。この土地がいはゆる滄桑の變をきはめた時、またわれ〳〵の祖先がこゝに安住の地を求めて、いばらを刈り道をひらきつゝ入りこんだ有史以前の時この古墳の中に骨を埋める人たちが國土の開發に骨折つた時代、奈良の都にまでこの土地が出した和銅を献つた時代、目の前の山谷に牧場が開けて、峯から吹きおろす青嵐にたてがみをけづつて肥えた若駒の幾十が、はる〳〵と東路のはてから貢がれて都近くの瀨田長橋を音もとゞろに踏みならし、仁壽殿の御前で叡覽に供へられた時代を思ふと、國の歴史をはら〳〵と始めから繰つてくるやうな氣がして、永遠な山河の姿の中に、それが跡づけられてゐる尊さを感ぜずには居られない。九州のはてまでも大君の守りの盾となつて赴いた防人の人たちは、故里をあとにこの川べの露を踏んで出かけて行つた。秩父の庄司と勇名の高い畠山重忠の父重能の館は吉田町にあつた。忠臣新田義貞の旗の下に勇名をあげた畑將軍時能も野上村の藤谷淵に緣があると傳へてゐる。この土地を拓いた人々の血は卽ち武藏武士の血につながつてゐて、この土の上に幾つもの足跡をとゞめたのである

大君の詔かしこみうつくしけ
眞子が手はなれ島傳ひゆく
助丁秩父郡大伴部少歳

**先人の恵**　私は原谷村の開墾地を通つた時のことも思ひ出した。この四圍を山にかこまれた盆地の底に、まだ〳〵開墾しなければならない土地が殘つてゐたのかと驚いた。そして秩父町の方から導かれて來る涓々たる流が、ゆたかに新しく開いた田をうるほして行つて、將來は幾百頃を青疊のやうにして行かうとする其の恵みをいまさらのやうに尊く感じた。水のない土地に水を與へる、これ餓ゑた者に食を與へ、こゞえたるものに衣を與へると等しい恵みではあるまいか。仁水といふ言葉があるが、この水をこゝに引いた人々の努力こそ卽ち仁である。それが縣當局の奬勵であらうとも、土地の人の計畫に成らうとも、それに力を盡したすべての人、一本の鍬をにぎり、一もつこの土をかついだ人々まで、その恩恵をこの土に永遠にのこして行くのである。われわれは決して自分の小さい力を輕んじてはならない。それは小なりとも萬世に利する事業をなす力である。

私はその開墾地を通りながら、三百年の昔にこゝを通りすぎた旅人のことをも思ひ出した。その旅人といふのは、江戸時代の初に出た川越の町人榎本彌左衞門である。

彼は正保元年霜月のこと、三峯參詣を志して、秩父町の源左衞門といふ者の馬に乘つてこの土地を過ぎつたのである。同行のものが遲れたので大野原新田の町を通りぬけて待つてゐると、遲れた人たちはその新田の眞直ぐな道を急いだ。すると土地の年寄が見つけて「御法度の道をあゞて通り候」ととがめて口論になり、大騷ぎになつたといこふとがある。これは彌左衞門の强膽に實直な土地の人があやまつて事がすんだ。かれ彌左衞門は、この事を「川越の名をあげ候」と自慢してゐるが、私にはそんな事はどうでもよい。たゞ今から三百年の昔に、もうこゝに新田を開く爲の努力が先人によつて拂はれたといふことが大切なのだ。いはゞ今日の秩父も今日の埼玉も、かうした古い祖先の人々の力によつてこの繁榮にまで到達したのである。

この大野原については、嘉永四年に影森村から用水を掘つて、灌漑に便したり新田を開いたりした、この土地の萩原佐傳治の功績も忘れはならない。彼は農業をはげんだ傍らお百姓のひまな時季を利用して諸國に賣藥行商をしてあるいた。土地の恩恵の乏しい土地の人が生活の爲に出稼ぎをすることは、越後、越中或は近江の人々によく

見ることであるが、彼もまたその勤勉な人々の仲間であつた。そして諸國をまはつて見ると、鄕土秩父の田畑の少ないことが心から慨かれたに違ひない。もすこし田でも多いならと思つてよその土地がうらやまれた時に、大きい刺激を彼の心に與へたものが、諸國で當時盛んに行はれた新田開發の事業であつた。

彼は自分の生れた大野原のことを考へて見た時、そこはたゞ水がないだけで田にならないことに思ひ當つて、獨力で金を出して、こゝに一條の用水をつくらうと決心をした。

諸國專ら新田開發、數ケ町出來、且又越後・信濃・甲斐・駿河四ケ國などは別して多分出來を見聞いたし候へば、下賤ながら有りがたき御儀と恐察奉り候。然るところ當郡御領內の儀も、とかく山林畑のみ、田地至つて少く、面々歎かはしき事に存じ候といふ心から、しめて百九拾五兩を投じて、人夫延べの千二百七十五人をつかつて、十九町の用水をつくることを企てたのである。しかもその忍領代官に出した願書の中に、

前書の金、恐れながら私より密に御上樣に御上納仕度候。

私年來丹精仕り置き候儀につき、右御普請掛りの間、諸職人手間賃錢、並びに木品代金、其の外は御國恩の爲、私より上樣に御上納いたし、御手普請成し下し置れ度。

と、全く自分の利益も名も忘れて、國家の爲と人々の爲に計畫努力した赤誠をあらはしてゐる。奉公の心はこの言葉にあふれてゐるのである。これに影森村の岡田宗太郎の助力が加はつて橋立用水が完成したが、それは實に今日の秩父水道の前身であつたのである。

**のこす言葉**　車窓にます〳〵闇の色は濃くなつて行つて、山麓の灯が急に近づいて來ると思ふと、停車ごとに呼ばれる驛の名はもう秩父と別れるのにほどもないことを知らせてゐた。私はこれで數日の旅を終つて、再び平野の忙しい生活に歸らうとするものであるが、しかし、その地をはなれるに當つて、この山ふところに見出した數々の事柄が、ます〳〵心の中に深く刻まれて行くばかりでなく、折があつたなら、またこの道を辿り入つて、雲取や甲武信の山の姿にもふれ、今日も藤衣の存してゐる浦山にわ

け入り、或は日野澤や倉尾の土地をも踏み、また尾田蒔村に孝子與右衛門の孝行畑をたづねて、そこの一粒の麥にも残る佳話を聞いたり、兩神の忠婢いし女の面影をのこる話の中にさぐりたいと思ふ。我が郷土埼玉の誇をなす秩父の山よ、永遠なれ。そこに住む人々の上に繁榮あれ。これが私の秩父にのこすたゞ二つの言葉である。

埼玉郷土讀本第一編　我等の埼玉　上卷　終

埼玉郷土讀本第一編　我等の埼玉　上卷

昭和七年十二月一日印刷
昭和七年十二月五日發行

定價　金拾五錢

不許複製

編者　埼玉縣浦和町
發行者　埼玉縣教育會
右代表　佐久間得三
埼玉縣川越市四七貳
發行所　明文堂書店　菅間定治郎
埼玉縣川越市一四五〇
印刷者　青山博吉
埼玉縣川越市一四五〇
印刷所　青山印刷所

終